

研究報告第59号

G11-02

中学校における「生き方」・高等学校に
おける「在り方生き方」教育にかかわる

進路指導の研究

1994. 3

山形県教育センター

研究報告書第59号 (平成6年3月刊)

中学校における「生き方」・高等学校における
「在り方生き方」教育にかかわる進路指導の研究

山形県教育センター

目 次

I 研究の趣旨

- 1 研究のねらい
- 2 研究の趣旨

II 研究の進め方

- 1 第1年次の研究
- 2 第2年次の研究
- 3 第3年次の研究

III 研究の内容

- 1 在り方生き方としての進路指導の基本的な考え方
- 2 進路指導に関する実態調査
- 3 研究仮説の設定
- 4 実践研究の内容

IV 研究のまとめと課題

- 1 研究のまとめ
- 2 研究の成果と今後の課題

研究の概要

I 研究のねらい

これからの学校教育では、生徒一人一人が、人間としての在り方生き方について自覚を深め、自らの将来の生き方を主体的に選択することができる能力を養うことが大切である。

本研究は、進路指導の立場から、中・高の進路指導の現状を踏まえ、進路指導上の問題点を明らかにするとともに、研究協力者による実践研究を通して、進路指導における在り方生き方指導の考え方とその進め方について、3年継続で研究する。

II 研究の進め方

- (1) 文献等による理論研究と進路指導に関する実態調査を行い、研究仮説を設定した。
- (2) 中学校及び高等学校に研究協力者を委嘱し、研究仮説を検証するため進路学習の実践研修を行った。
- (3) 進路指導実践の過程において、生徒の進路や学校生活に対する関心、意欲、態度等がどのように変容していくかを観点別に評価し、記録した。
- (4) 研究協力者による実践研究の成果を踏まえ、在り方生き方指導として、望ましい進路指導の考え方とその進め方についてまとめた。

III 研究のまとめ

- (1) 進路指導の実態調査及び研究協力者による実践研究等から、より望ましい進路指導を行う場合に留意すべき点と改善すべき点が明らかになった。
- (2) 在り方生き方指導として、望ましい進路学習の指導実践例を提示した。
- (3) 在り方生き方指導に中・高の一貫性を持たせるため、進路指導における中・高の連携について、基本的な考え方とその進め方を提示した。
- (4) 進路指導の評価に関しては、評価の観点を整理して、より客観性のある評価の在り方について、今後さらに研究を深めていく必要がある。

キーワード（進路指導）（在り方生き方教育）（特別活動）
（学級（HR）活動）（進路指導における中・高の連携）

は し が き

これからの学校教育では、小・中・高が一貫して、人間としての在り方生き方に関する教育を行うことが強く求められている。

人間としての在り方生き方に関する指導援助は、各教科・科目、道徳、特別活動などの学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的に行わなければならない。そして、その指導援助は、進路指導とも深くかかわってくるものであり、これからは、進路目標の達成に力点が置かれてきた進路指導から、人間としての在り方生き方を探求する進路指導に転換していかなければならない。

変動目まぐるしい今日の社会情勢の中で、自分の将来の生き方に対して、目的や目標を見出せずにいる生徒が多いと言われている。この目的意識の希薄さが、中途退学をはじめとする多くの問題行動の一因になっていると指摘されている。また、中学校における業者テスト廃止問題、高校入試制度の改善等、進路指導を取り巻く教育環境も大きく変わりつつある。

このような背景を受け、当教育センターでは、生徒が、人間として社会人として、在り方生き方について自覚を深め、将来の目標をしっかりと持ち、主体的に進路を選択することができる能力を身につけるため、進路指導の研究を3年継続で実施してきたところである。

この報告書は、1、2年目の研究成果を踏まえ、研究協力者による実践研究を通して深化発展を図り、在り方生き方指導として、望ましい進路指導の進め方について、3年間の研究成果をまとめたものである。平成3年度及び平成4年度の研究内容をまとめた中間報告書とともに活用していただきたい。

最後に、この研究を進めるに当たり、御協力をいただいた学校及び研究協力者の方々に感謝するとともに、本研究が、社会の変化に主体的に対応し、たくましく生きる生徒の育成を目ざす進路指導への手がかりになれば幸いである。

平成6年3月

山形県教育センター

所長 白 畑 博

目 次

研究協力者（校）

《平成4年度》

天童市立第四中学校	教諭	田 澤 昭 子
天童市立第四中学校	教諭	志 田 孝 宏
米沢市立第六中学校	教諭	神 保 雅 寿
山形県立天童高等学校	教諭	櫻 井 忠 夫
山形県立天童高等学校	教諭	青 木 章 二
山形県立米沢東高等学校	教諭	池 田 正 平

《平成5年度》

天童市立第四中学校	教諭	丹 野 善 幸
天童市立第四中学校	教諭	西 塚 淳
米沢市立第六中学校	教諭	神 保 雅 寿
米沢市立第六中学校	教諭	渡 邊 節 子
山形県立天童高等学校	教諭	櫻 井 忠 夫
山形県立天童高等学校	教諭	大 谷 学
山形県立米沢東高等学校	教諭	安孫子 信 行
山形県立米沢東高等学校	教諭	庄 司 優 子

研究担当者

《平成3、4、5年度》

指導主事	菊 地 善 教
指導主事	佐 藤 時 男
指導主事	池 田 正
指導主事	富 士 直 志

I 研究の趣旨

1 研究のねらい	1
2 研究の趣旨	1
(1) 学校教育の今日的課題	1
(2) 研究の観点	1

II 研究の進め方

1 第1年次の研究	3
(1) 研究のねらい	3
(2) 研究の方法	3
2 第2年次の研究	3
(1) 研究のねらい	3
(2) 研究の方法	3
3 第3年次の研究	4
(1) 研究のねらい	4
(2) 研究の方法	4

III 研究の内容

1 在り方生き方指導としての進路指導の基本的な考え方	5
(1) 進路指導の目標について	5
(2) 進路指導の指導内容について	6
(3) 在り方生き方指導としての進路指導が目ざす生徒像	12
(4) 進路指導推進の必要条件	12
2 進路指導に関する実態調査	13
(1) 実態調査の実施	13
(2) 実態調査の結果にみる進路指導上の課題	13
3 研究仮説の設定	14
4 実践研究の内容	15
(1) 第2年次の研究協力者と実践研究内容	15
(2) 第2年次の実践研究についての考察	15
(3) 第3年次の研究協力者と実践研究内容	16
(4) 第3年次の実践研究と考察	17

IV 研究のまとめと課題

1 研究のまとめ	50
(1) 在り方生き方指導としての進路指導の観点について	50
(2) 研究仮説の検証と今後の展望について	52
2 研究の成果と今後の課題	53
(1) 研究の成果	53
(2) 今後の課題	53
※ 参考文献	54

I 研究の趣旨

1 研究のねらい

中学校における「生き方」・高等学校における「在り方生き方」教育にかかわる進路指導の考え方を明らかにするとともに、望ましい進路指導の進め方について提言する。

2 研究の趣旨

(1) 学校教育の今日的課題

- ① 社会の諸情勢の変化は、生徒の生活環境に多大な影響を与えている。とりわけ、産業構造の複雑化によって社会がますます不透明になり、生徒の周囲には生き方を学ぶモデルが少なく、自分の将来の生き方に対し見通しを立てにくくなってきている。一方、学校教育においては、厳しい競争社会に対応して、学力の向上を旨とした学習指導と当面の進路選択に向けた指導に重点が置かれている。

このような状況を背景として、将来の生き方について、目標や生きがいを見出せず
に悩み苦しみ、学校生活に意欲を失ってしまっている生徒や、学校生活に不適應を示
す生徒が多くいると指摘されている。そして、このような生徒の実態は、本県におい
ても同様の状況を呈している。

したがって、これからの学校教育では、将来の生き方にしっかりとした目標と生き
がいを持ち、その目標に向かって努力し続けようとする態度と、社会の変化に主体的
に挑戦して乗り切っていくたくましい心を育てていくことが大切である。この意味
で、生徒一人一人の将来の生き方にかかわる教育を一層推進することは、学校教育の
今日的課題である。

- ② 現在、進路指導を取り巻く教育課題が多く見られる。それは、進学指導の過熱化に
よる弊害、不本意入学意識を抱く生徒に対する指導、学校生活不適應、とりわけ高等
学校における中途退学への対応、離職・転職の増加にみられる学校卒業後の進路適応
の問題、3K労働忌避に代表される労働・職業に関する価値観の変化等である。

このことは、中学校及び高等学校における進路指導の在り方と深く結びついた教育
課題であり、いずれも、生徒一人一人の将来の生き方にかかわる課題でもある。

(2) 研究の観点

- ① これからの学校教育では、生徒一人一人が、自分の将来の生き方を主体的に選択す
ることができる能力を養う指導が大切である。
- ② 中学生及び高校生に対して、その発達に応じ、人間としての在り方生き方について

指導することは、生涯学習社会を迎えた今日、学校教育の果たすべき大きな教育課題である。

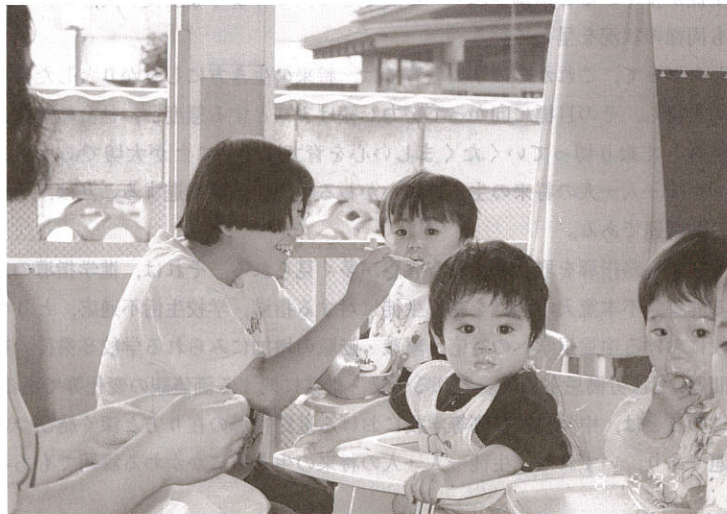
③ 生徒に対して、将来の生き方や社会の一員としての在り方の自覚を促し、進路意識を喚起させることは、学習意欲の高揚と学校生活へ意欲的に取り組む態度の育成にも結びついていくと考える。

④ 教師は、進路指導の重要性に対する認識は高いが、その指導理念や指導法に関しては、多くの不安と悩みを抱えていると思われる。

一方、生徒や保護者は、生き方について価値観が多様化してきており、進路指導に対する要望や期待も幅広いものになってきている。

⑤ 当教育センターでは、昭和60年度から昭和63年度にかけて、進路指導に関する研究を行っている。その中で、生徒一人一人の生き方に迫る進路指導の進め方について、研究を深めることの重要性を強調している。

(1)、(2)に述べた現状認識に立ち、人間としての在り方生き方にかかわる教育が、新しい教育の基本理念として打ち出された今日、在り方生き方指導としての進路指導について研究することは、教師のみならず生徒、保護者にとっても意義があると考ええる。



職場体験学習の様子（米沢市立第六中学校 平成5年）

Ⅱ 研究の進め方

本研究は3か年の継続研究であり、その年次計画は次のとおりである。

1 第1年次の研究（平成3年度）

(1) 研究のねらい

進路指導における在り方生き方指導について、基礎研究と進路指導の現状に関する実態調査の分析結果に基づき、研究の方向性と研究仮説を設定する。

(2) 研究の方法

① 文献等の調査研究を通し、次の内容を中心に基礎研究を行った。

ア 進路指導における「生き方」「在り方生き方」指導の考え方

イ 進路指導の意義、目標、指導の観点、指導内容

ウ 進路指導が目指す生徒像

② 基礎研究に基づき、学校において、進路指導をさらに推進する上で特に重要であると考えられる点を示した。

③ 進路指導の現状を把握するため、県内の中学校及び高等学校の進路指導の現状に関する実態調査を実施した。

④ 進路指導の現状に関する実態調査の分析結果に基づき、研究仮説を設定した。

2 第2年次の研究（平成4年度）

(1) 研究のねらい

研究仮説を検証するため、研究協力者による実践研究を通して、在り方生き方指導としての望ましい進路指導の進め方について研究を深める。

(2) 研究の方法

① 本研究を推進するため、県内の中学校及び高等学校の進路指導主事及び学級（HR）担任に研究協力者を委嘱し、特に、啓発的経験にかかわる体験的進路学習と、学級（HR）活動における授業の在り方について実践研究を行った。

② 進路指導の実践を通して、生徒の進路や学校生活に対する意識、意欲、態度等がどのように変容していくかを観察し、観点別に評価し記録した。

③ 研究協力者による実践研究の内容を、研究仮説に照らして吟味検討し、指導内容と指導方法の見直しと改善を図った。

3 第3年次の研究（平成5年度）

(1) 研究のねらい

研究協力者と共同でさらに実践研究を進め、学校における在り方生き方指導として、望ましい進路指導の進め方について、研究を発展させるとともに研究内容をまとめる。

(2) 研究の方法

- ① 研究協力者を平成4年度と同じ学校の教員に委嘱し、研究計画に基づき実践研究を継続して行った。
- ② 実践研究は、進路指導主事及び学級（HR）担任の役割と実務に関する研究と進路指導を推進するため、中・高の協力・連携の在り方に関する研究に重点を置いて行った。
- ③ 生徒の進路や学校生活に対する意識、意欲、態度等の変容については、継続して観察し記録した。
- ④ 研究協力者による実践研究を踏まえ、学校における在り方生き方指導として、望ましい進路指導の考え方とその進め方について研究をまとめた。



学級活動での進路学習の様子（天童市立第四中学校 平成5年）

Ⅲ 研究の内容

1 在り方生き方指導としての進路指導の基本的な考え方

文献等の調査研究を通して、在り方生き方指導として、進路指導をさらに推進していく上での基本的考え方について、ここでは、進路指導の目標、進路指導の指導内容、進路指導が目ざす生徒像、進路指導推進の必要条件について述べる。

(1) 進路指導の目標について

- ① 人間としての在り方生き方教育にかかわる指導内容は、哲学的内容、倫理的・道徳的内容など広範囲にわたるため、学校のエデュケーション全体を通じて指導しなければならない。

その中で進路指導は、将来の職業を通じていかに生きるかということに焦点を当てた指導である。生徒一人一人に対し、望ましい勤労観、職業観を育成し、将来の職業生活に不可欠な基礎的知識、技能を身につけさせ、個性や進路適性に応じた指導を通じて、将来のよき職業人を育てることが、進路指導の重要な目標の一つである。

- ② 生徒にとっては、受験も進学も手段であって人生の目標ではない。上級学校に進学しても、最終的には職業人として社会に生きていくのである。したがって、進路指導は、目先の進路の選択指導や当面の受験や進学のみを目を奪われることなく、将来、職業を持った社会人としての生き方に視点を置きながら、生徒に対しては、

- ◆ 自分は社会の一員としてどういう姿勢、態度をとるか、どういう生き方をするのか。
- ◆ 生きる目標や生きがいとは何か。
- ◆ その目標や生きがいを実現するためには、どのような計画を立てたらよいのか。
- ◆ その計画の中にはどのような進路選択を組み入れたらよいのか。
- ◆ その進路を実現するためにはどう在るべきか、今何が必要であり何をすべきなのか。
- ◆ 学校生活や学習はどのような意義を持つのか。

といった、自己実現への自覚を促したり援助したりする教育活動でなければならない。

- ③ 進路の選択決定にかかわる進学指導や就職指導は、進路指導として重要な指導である。そのために、学力向上の指導を充実させることや、合格可能な進路先の選択について指導することも進路指導である。しかし、それらは進路指導の一部であってすべてではない。

望ましい進路指導を進める上で大切なことは、進路の選択決定に至る過程において、生徒が、中・高校生なりに、自己の進路適性の吟味やその理解、望ましい職業観や将来の生活の設計等について考えることができる学習を十分に行うことである。そして、それらの学習を通じ、将来の生き方を自覚しながら、主体的に進路を選択し決定するための資質・能力を、どれだけ身につけ発達させてきたかという点である。この部分の指導が欠落していれば、進路選択も偏差値等によって振り分ける指導しかなくなってくるのである。

(2) 進路指導の指導内容について

- ① 生徒が進路の自己実現を目指すためには、主体的に進路を選択決定できる能力を育てることが重要になってくる。そのためには、図1 (p6) に表したように、進路指導における6つの指導領域を、学校教育全体に計画的、組織的、系統的に位置づけ、全教師がそれぞれの役割に応じて適切な指導を行わなければならない。

図1 学校の教育活動などにおける進路指導領域と指導場面の関係図

指導領域 実践指導場面		1	2	3	4	5	6
		自己理解	進路情報の提供	進路相談	啓発的計画	進路選択・決定	追指導
1	各教科を通じて行う指導	○	○		○		
2	道徳教育を通じて行う指導	○					
3	進路指導部で行う指導		○	○	○	○	○
4	特別活動で行う指導	○	○	○	○	○	○
5	学校全体で行う指導		○		○		○
6	保護者と協力して行う指導		○	○	○	○	○
7	地域・諸機関と協力して行う指導		○		○	○	○

- ② 進路指導は全教師が取り組む教育活動であるが、その指導を補充し深化・発展させ、進路指導の中心となる場合は学級 (HR) 活動である。

学級 (HR) 活動は、学習指導要領における指導内容をみると、進路指導と関連づけながら、人間としての在り方生き方指導がその指導の中心になっている。学級 (HR) 活動における進路指導にかかわる指導内容は、次の5項目 (高等学校は6項目) である。

- ① 進路適性の吟味 (理解) ② 進路情報の理解と活用 ③ 望ましい職業観の形成
④ 将来の生活設計 ⑤ 適切な進路の選択 (選択決定) ⑥ 進路先への適応
(高校のみ)

その具体的指導については、特に、次の観点に立ち指導することが大切である。

- ア 中学校と高等学校の指導内容に共通しているのは、いずれも、個人の価値判断や価値観と深くかかわる内容であるという点である。したがって、学級 (HR) 活動での進路指導の中心的ねらいは、5項目の具体的指導を通して、望ましい勤労観、職業観、人生観などの価値観を育成していくことである。
- イ 中学校と高等学校の指導内容に共通性がみられるのは、中・高それぞれの進路の発達課題に応じて、一貫した進路指導を目ざそうとするねらいからである。生徒の進路の発達課題に対応した指導の観点は、表1 (pp.9～10) のようにまとめることができる。
- ウ 生徒の入学時から卒業時までには指導する内容は、「望ましい進路指導の全体図」として図2 (p11) に示したように、最終学年までに、生徒が、主体的に進路を選択することができる能力が身につくように、1, 2年生での指導を充実させるなどして、計画性と系統性を持った内容でなければならない。

表 1

進路発達段階	小 学 校		
	11歳	18歳	19歳
進路発達課題	◇自己概念の発展を図る。 ◇興味・関心が職業希望へ。 ◇能力が重視され、仕事覚を深める。	◇自己概念の発展を図る。 ◇興味・関心が職業希望へ。 ◇能力が重視され、仕事覚を深める。 再検討し具体化を図る。 世界を理解し情報の活用を深める。 化を図り、進路実現に努める。	
進路実現までの過程	◆将来何になりたいか (夢、憧れ) ◆何のために (生き方)	◆将来何になりたいか (夢、憧れ) ◆何のために (生き方)	◆将来何になりたいか (夢、憧れ) ◆何のために (生き方)
指導の観点	●家庭や学校等の身近な価値観の形成を通じ、社会の一員としてし、将来の生き方に興覚を深める内容に焦点を当てた指導に焦点を当てた指導	●家庭や学校等の身近な価値観の形成を通じ、社会の一員としてし、将来の生き方に興覚を深める内容に焦点を当てた指導に焦点を当てた指導	●家庭や学校等の身近な価値観の形成を通じ、社会の一員としてし、将来の生き方に興覚を深める内容に焦点を当てた指導に焦点を当てた指導
学習内容のキーワード	○将来への夢、憧れ、希望 ○身近にある職業調べ (職業) ○身近に見る様々な生き方 ○理想の生き方 ○将来就きたい職業と条件と	○就きたい職業と適性 ○人生の目標、生きがい ○生き方モデルと自分 ○産業社会の現状理解とその対応 ○進路希望先訪問 ○先輩の進路選択や生き方に学ぶ ○進路選択・決定 ○社会人としての心構えと社会貢献 ○卒業後の展望	○就きたい職業と適性 ○人生の目標、生きがい ○生き方モデルと自分 ○産業社会の現状理解とその対応 ○進路希望先訪問 ○先輩の進路選択や生き方に学ぶ ○進路選択・決定 ○社会人としての心構えと社会貢献 ○卒業後の展望

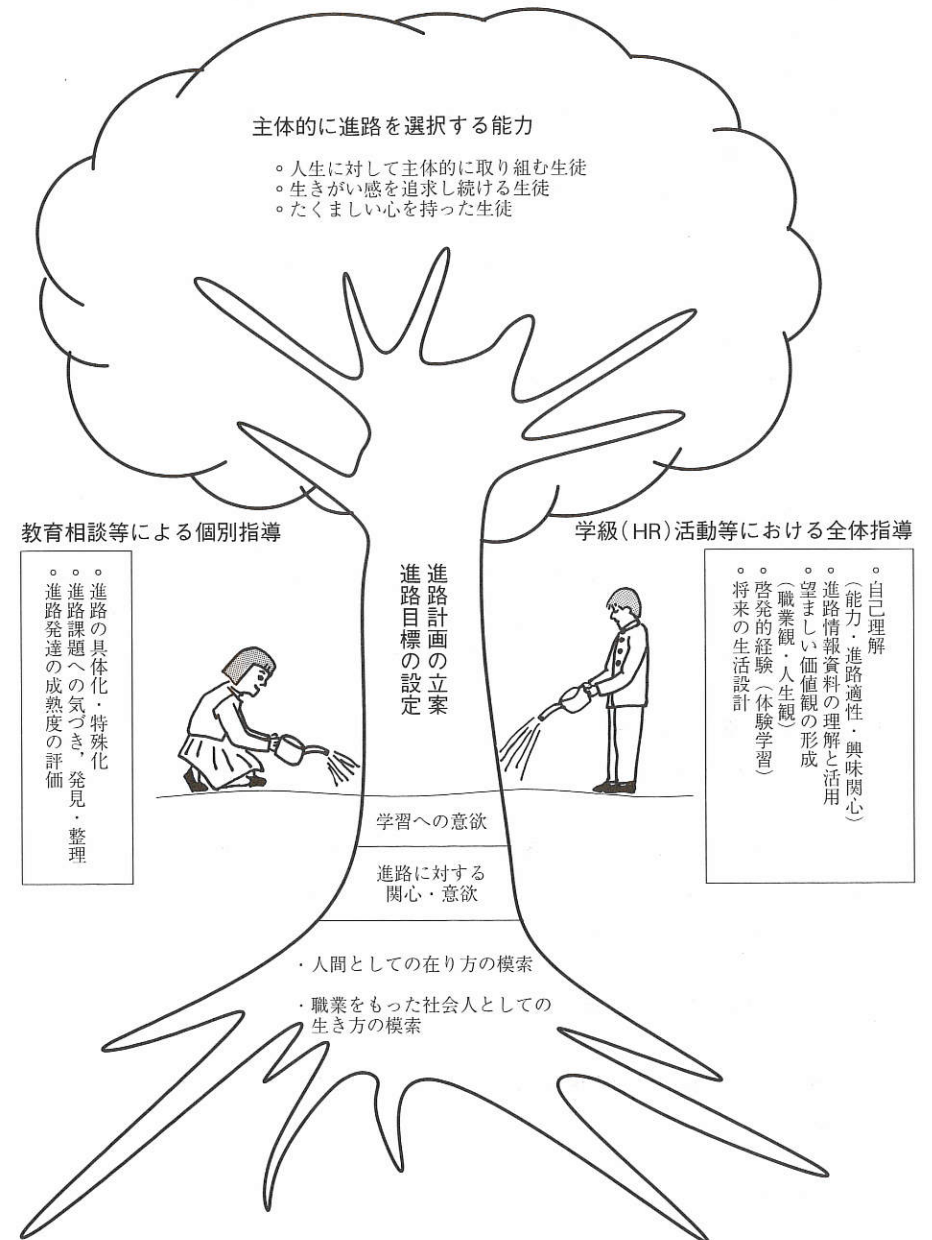
表1

進路発達モデル — 進路の発達課題に対応した進路指導の観点 —

進路発達段階	小 学 校 (進路成長の興味・能力期)			中 学 校 (進路模索の暫定期)			高 等 学 校 (進路模索の試行期・実現期)		
	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳
進 路 発 達 課 題	◇自己概念の発展を図ろうとする。 ◇興味・関心が職業希望の主要な決定要因となる。 ◇能力が重視され、仕事の所要条件が考慮される。			◇自己概念の明確化を図ろうとする。 ◇将来の生き方に自覚と関心を持つ ◇暫定的な進路計画を立案する。 ◇教育・進路・職業に関する情報の理解と活用を努める。 ◇自立の精神を身につける。			◇自己概念を実現的に吟味し確立を図る。 ◇価値観の確立に努める。 ◇望ましい生き方の自覚を深める。 ◇進路計画を実現的に再検討し具体化を図る。 ◇教育・進路・職業の世界を理解し情報の活用を深める。 ◇進路の特殊化・具体化を図り、進路実現に努める。		
進 路 実 現 までの過程	◆将来何になりたいか (夢、憧れ、希望⇒職業への興味) ◆何のために (生き方への興味⇒理想の生活)			◆自分は何に向いているか (個性、適性、能力⇒自己理解) ◆将来何になりたいか (夢、希望、期待、可能性⇒職業への関心) ◆何のために (生き方への自覚と関心⇒暫定的な生活設計) ◆なるにはどうするか (進路の模索、進路選択⇒暫定的な進路計画)			◆自分は何に向いていて何になりたいか (個性、適性、能力の吟味⇒自己理解の深化) (現実を踏まえた将来の職業検討⇒職業の理解) ◆なるべきかどうか (職業人としての生き方の自覚、生きがいがいい、やりがいがいい⇒職業観) (職業と勤労・仕事、結婚、家庭、余暇活動、諸条件⇒生活設計) (生きる目的・目標、幸福、社会貢献、社会と自分⇒人生観) ◆なれるか (実現を踏まえた可能性、なるための条件⇒進路計画) ◆なろう (進路実現への準備、強い意思、努力⇒進路の自己実現)		
	進路への興味 → 進 路 へ の 自 覚 と 関 心 → 進 路 の 模 索 → 暫 定 的 な 進 路 計 画 → 進 路 計 画 の 吟 味 → 進路の特殊化と具体化 → 進路への集中的準備 → 進 路 実 現								
指 導 の 観 点	●家庭や学校等の身近な社会や日常の学習を通して、将来の生き方に興味や関心を持たせる内容に焦点を当てた指導 人間としての在り方生き方の基礎を身につける段階			●自分の将来の生き方や進路に対する自覚と関心を深める内容に焦点を当てた指導 ●将来、職業を持った社会人としての生き方に対する自覚と関心を促す内容に焦点を当てた指導 人間としての在り方生き方を、生き方の自覚を通して身につけていく段階 《生き方指導に焦点を当てた進路指導》			●職業観、人生観等の価値観の形成を通じ、社会の一員としての在り方について自覚を深める内容に焦点を当てた指導 ●進路決定に向けた具体的準備への意欲を高める内容に焦点を当てた指導 ●社会に巣立つ前段階として、よりよい社会人よりよい職業人としての在り方生き方について自覚と実現を促す内容に焦点を当てた指導 人間としての在り方生き方を自覚し実現していく段階 《在り方生き方指導に焦点を当てた進路指導》		
学 習 内 容 の キーワード	○将来への夢、憧れ、希望 ○身近にある職業調べ ○身近に見る様々な生き方 ○理想の生き方 ○将来就きたい職業とその理由			○将来の夢と希望 ○適した職業と就きたい職業 ○生き方モデル ○職場体験学習 ○保護者との交流 ○先輩の生き方に学ぶ ○将来の生活設計 ○高校生活と進学目的 ○高校の学科と学習内容 ○進路選択 ○高校卒業後の進路			○様々な職業（職業調査） ○職業に就くまでの道のり ○職場見学 ○上級学校訪問、体験入学 ○職業に関する講話 ○先輩と進路を語る ○進路計画と目標 ○進路と学習 ○高校中退と進路変更 ○進路情報の理解と活用 ○学校卒業後の展望		
	○様々な職業（職業の理解） ○やりがいがいいのある仕事（職業） ○様々な人生と人生観 ○将来の生活設計と展望 ○職業に就くための条件とその実現過程 ○啓発的体験学習 ○進路に関する講話 ○進路計画と目標 ○進路実現への準備 ○離職・転職とキャリア・アップ ○就きたい職業と適性 ○人生の目標、生きがいがいい ○生き方モデルと自分 ○産業社会の現状理解とその対応 ○進路希望先訪問 ○先輩の進路選択や生き方に学ぶ ○進路選択・決定 ○社会人としての心構えと社会貢献 ○卒業後の展望								

図2

望ましい進路指導の全体図



(3) 在り方生き方指導としての進路指導が目ざす生徒像

進路指導が目ざす生徒像は、指導によってどのような生徒を育てようとするのか、生徒にどのような資質・能力を身につけてほしいのかという教師、保護者の願いを明確にし、全体指導計画の中に位置づけることが大切である。

進路指導が目ざす生徒像については、主体的に進路を選択することができる生徒を育成するという観点から、次のようにまとめた。

① 人生に対し主体的に取り組む生徒

自分の人生は、自ら考え、自ら選択決定し、その結果についての責任は自分が負うという自覚を持ち、進路目標達成のために必要な資質・能力を自ら進んで身につけようとする意欲に満ちた生徒である。

② 生きがい感を追求し続ける生徒

生き方については、自分を他人と比較して劣等感に陥ることなく、常に自分を見つめ、自分の可能性と独自性を生かし、自分の選んだ人生の生きがいや目標に向かって、前進していく姿勢を持った生徒である。

③ たくましい心を持った生徒

社会の進展や変化に対しては、主体的に挑むたくましい精神を持ち、いつでも学習し続けるという生涯学習への意欲に満ち、実践できる生徒である。

以上の観点から、自己実現のため、学習の意義を自覚し学力高めようとする取り組みは、葛藤を乗り越えて生きる力を獲得していくための大切な過程であると考ええる。

(4) 進路指導推進の必要条件

文献等の調査研究を通じ、在り方生き方指導としての進路指導を推進していくために、特に、重要であると考えられる条件を次のようにまとめた。

① 在り方生き方指導としての進路指導の考え方について、共通理解を図ること。

② 進路指導が目ざす生徒像を明確にし、系統的な全体の指導計画を作成すること。

③ 進路指導主事の役割と任務を明確にし、リーダーシップが発揮できるよう条件整備をすること。

④ 指導においては、計画 → 実施 → 評価 → 改善の指導手順を明確にし、実行すること。

⑤ 職業観や人生観等の価値観の形成に関する指導を充実させること。

⑥ 職業観の形成にかかわっては、啓発的経験に関する体験学習を積極的に実践すること。

⑦ 将来の生活設計、進路計画に関する指導を重視するとともに、進路相談等による個別指導の充実を図ること。

⑧ 1, 2年生の段階における指導時間を十分に確保し、指導内容の充実を図ること。

⑨ 生徒の進路意識の実態について把握し、指導に生かすこと。

⑩ 保護者と協力した指導の在り方について工夫すること。

2 進路指導に関する実態調査

(1) 実態調査の実施

進路指導推進のための必要条件と考えた前述①～⑩の事柄に関して、県内の中学校及び高等学校の進路指導の現状について、質問紙法によって実態調査を行った。

① 調査対象者

中学校30校及び高等学校18校の進路指導主事、学級（HR）担任、生徒、保護者

② 調査の実施時期

平成3年11月1日～11月16日

③ 調査対象者人数と回答回収率

	対象者数	回収実数	回収率		対象者数	回収実数	回収率
中学校	3,924	3,836	97.8%	高等学校	3,111	2,885	92.7%

(2) 実態調査の結果にみる進路指導上の課題

実態調査の結果を、進路指導推進のための必要条件に照らして分析し、中学校及び高等学校において、進路指導を推進する上での課題を次のようにまとめた。

① 進路指導の理念の捉え方については、教師間で理解と認識に大きな差がみられ、進路指導を推進する上で障害になっている。

② 進路指導主事が進路指導推進のためのリーダーシップを十分に発揮していない。あるいは、その役割を十分に果たすことができない状況がみられる。これは、特に中学校に多くみられる状況である。

③ 進路指導は、依然として3年生中心に行われており、1, 2年生では進路指導の学習時間が少ない。

④ 教師は、在り方生き方指導にかかわっては、職業観や人生観等望ましい価値観の形成に関する指導が大切であるという認識を持っている。しかし、その指導内容や指導法、指導時間の不足について悩んでいる教師が多くいる。

⑤ 啓発的経験にかかわる体験的学習がまだまだ不十分である。

⑥ 保護者と共に進める進路指導の活動が十分でなく、依然として学校からの一方通行的な関係になっている。また、保護者の進路指導に対する期待は大きく、特に、将来

の生き方や職業に関する指導の充実を望んでいる。しかし学校は、その期待に十分応えていない。

- ⑦ 生徒の進路学習意欲は高い。しかし現状では、生徒の進路発達課題に対応し、生き方に迫る指導を計画的に行うまでには至っていない。

なお、実態調査の結果の詳細は、本研究の平成3年度中間報告書に記載してある。

3 研究仮説の設定

在り方生き方指導として、望ましい進路指導に近づいていくためには、前述の①～⑦に示した課題を解決していくことが必要である。生徒は、その課題解決の過程において、本研究が提起した、進路指導が目ざす生徒像に近づくという観点に立ち、研究仮説を次のように設定した。

研 究 仮 説

次の項目を重点的に実践することにより、在り方生き方教育にかかわる調和のとれた望ましい進路指導の進め方になる。

- ① 進路指導主事を中心に、進路指導研修会を多く開催し、在り方生き方指導としての進路指導の進め方に関して教師間の共通理解を図ること。
- ② 学級（HR）活動においては、進路適性の吟味と理解、将来の生活設計、望ましい職業観の形成に関する指導を重視すること。
- ③ 学校全体または各学年において、啓発的経験にかかわる体験学習を積極的に計画し実践すること。
- ④ 学級（HR）担任を中心に、進路相談にかかわる個別指導を徹底すること。
- ⑤ 保護者の協力を得て、保護者と共に進める進路指導の在り方について研究すること。

4 実践研究の内容

(1) 第2年次の研究協力者と実践研究内容

平成4年度は、研究仮説を検証するため、研究協力者を委嘱し、研究協力者による実践研究を通して、在り方生き方指導としての進路指導の進め方について研究を深めた。

研究協力者は、進路指導における中・高の協力の在り方を探るという視点から、同地区の学校に委嘱するという観点に立ち、天童地区及び米沢地区の、天童市立第四中学校、米沢市立第六中学校、県立天童高等学校、県立米沢東高等学校の進路指導主事及び学級（HR）担任にお願いした。研究協力者が行った実践研究の主な内容は次のとおりである。

進路指導主事	●啓発的経験にかかわる体験的進路学習についての研究
学級（HR）担任 中学校：3学年 高等学校：1、2学年	●学級（HR）活動における進路指導の授業研究 ●生徒の進路意識、意欲、態度等の変容の観察と記録

なお、実践研究の詳細は、本研究の平成4年度中間報告書に記載してある。

(2) 第2年次の実践研究についての考察

研究協力者が行った実践研究の考察から、指導上の留意点を次のようにまとめた。

① 学級（HR）活動における進路学習に関して

ア 研究授業の参観と生徒への進路に関する調査から、生徒は、自分の将来の生き方と進路について重大な関心を持っていることがわかった。

生徒の心に内在している、将来の生き方と進路に対する旺盛な探求心を基盤にすれば、教師が生徒に対して、進路に関する刺激の与え方、進路学習の内容や指導方法等を工夫改善することによって、今以上に、生徒一人一人の生き方に迫る指導を行うことができると考えられる。

イ 学習内容と学習時間については、生徒の入学時から卒業時までの進路発達課題を踏まえながら、系統的に計画を立てるとともに、学習時間の確保に努める必要がある。

ウ 進路学習の授業は、計画 → 事前学習（準備） → 授業の実施 → 事後学習（評価）の手順で行い、放課後の学習や家庭学習等を活用しながら、事前学習と事後学習を十分行うことによって、より成果が期待できる授業になる。

エ 生徒に対しては、日ごろから一斉学習のみならず、班別学習、グループ学習、役演技法、ロールプレー等、様々な学習形態な慣れさせておく必要がある。

進路学習では、できるだけ生徒の学習活動を中心に据え、生徒一人一人が、お互い

に学習を深め合う過程で、新しい知識や様々な考え方に気づき、発見し、自覚し、認識していくことが大切である。さらに、自分にとっての新たな進路課題に気づいていく学習にまで高めるため、学習方法や教材、学習形態等を工夫することが必要である。

② 啓発的経験にかかわる体験学習に関して

ア 職場体験学習は、綿密な計画と準備に多くの時間を要するが、在り方生き方指導にかかわる職業観を培うためには、大きな成果が期待できる学習であることがわかった。

イ 高校一日体験学習は、参加する生徒が、進路希望と目的意識を明確に持って参加することによって、大きな成果が期待できる学習である。そのため、進路目的、進路計画、進路選択等に関する事前指導を十分にしておくことが大切である。

ウ 職場見学学習は、見学した結果、仕事の辛さや厳しさだけを印象として捉えてしまい、望ましい職業観の形成に結びつかないことも懸念される。したがって、学習の実施に当たっては、見学する職場の環境、仕事の内容、社会への貢献、そこで働いている人が感じている生きがいや仕事のやりがい等について、十分な事前学習を行う必要がある。

③ 実践研究全体を通して

進路学習の内容をより充実させ、生徒の将来の生き方に迫る進路指導を進めるためには、中・高が、それぞれに行っている進路学習の内容を理解しあい、生徒の進路の発達課題を考慮しながら、中・高一貫した進路指導を推進する必要がある。

以上の実践研究における指導上の留意点は、第3年次の実践研究に生かされた。

(3) 第3年次の研究協力者と実践研究内容

平成5年度は、平成4年度の実践研究の成果と課題を踏まえ、研究を深化・発展させるため、平成4年度と同じ学校の進路指導主事及び学級(HR)担任を研究協力者に委嘱した。

研究協力者の行った実践研究の主な内容は次のとおりである。

進路指導主事	●中・高の協力による進路指導に関する研究 ●進路指導主事の役割と実務に関する研究(中学校) ●進路指導の評価について調査の実施とまとめ ●保護者、先輩、卒業生と協力して進める進路指導に関する研究
学級(HR)担任 中学校：3学年 高等学校：1学年	●中・高の協力による進路指導に関する研究 ●進路学習の授業研究 ●生徒の進路に対する意識、意欲、態度等の変容の観察と記録 ●年間における進路指導実践の記録

(4) 第3年次の実践研究と考察

2年間にわたる基礎研究と実践研究によって、在り方生き方指導としての進路指導は、生徒の進路の発達課題を考慮しながら、中・高一貫して指導することが大切であることがわかった。

しかも、各学校が、研究仮説で設定した①～⑤の内容を実行してだけでなく、中・高の協力に基づく進路指導を実践していくことが、研究仮説の妥当性をより高めるものになると考えられる。

平成5年度は、上記の観点に立ち、研究協力者は、中・高が協力して進める進路指導の在り方の追究に焦点を当てながら、前記内容の実践研究を行った。

① 中・高の協力による進路指導の在り方について

ア 中・高一貫した進路指導の在り方を追究するため、次のことを行った。

(7) 中学校の研究協力者が行った研究授業を、高等学校の研究協力者が参観した。また、高等学校の研究協力者が行った研究授業を、中学校の研究協力者が参観した。さらに、研究授業実施後には参加者による研究会を開催した。(年4回)

(4) お互いの実践研究の成果を持ちより、実践研究を踏まえて中・高の協力の在り方について研究を深めるため、研究協力者会議を開催し、中・高話し合いを持った。

(7) 研究会では、特に①中・高の進路指導の実情の相互理解を深めること。②進路指導において、中・高が具体的に協力しあえる事柄について研究を深めた。

イ 研究会において話し合われた事柄をまとめると次のようになる。

※ 文中の(中・担)は中学校の担任の研究協力者
(高・主)は高等学校の進路指導主事の研究協力者

中・高校相互理解について

〈学級(HR)活動における進路学習に関して〉

A : 高校の授業をはじめて見させていただいた。実際の授業を見ることによって(中・担) 中・高の進路発達に応じた学習内容の違いがわかってきたような気がします。

「10年後の私」というテーマでの学習でしたが、中学校でも同じような学習を行います。しかし、中学校の学習とは観点に違いがあるようです。高校生になると、将来の生活設計についても現実的に考えてくるようですね。そして、職業、仕事、結婚、家庭生活等の考え方も、生きがい、やりがい、人生観といった価値観とのかかわりで考えさせようとしているようです。中学校ではここまで深く学習できませんし、生徒の発達段階からみても無理があります。

B : 私をはじめて中学校の授業を見る機会を得ましたが、授業中の生徒の発言等(高・主) からも、高校生との進路発達の違いを感じました。

生徒の進路発達に対応した指導という観点に立てば、中学校では、将来どういう職業や仕事に就いてどのような生活や生き方をイメージするのか。また、その職業や仕事に就くにはどうすればよいのか、働くということはどういうことなのかといった将来の生き方に焦点を当てた指導が中心になると思うのです。そうした指導を通して少しずつ、自分にとって生きがいややりがいのあり仕事とは何なんだろう、幸福って何なんだろうという価値観に目覚めていくのが、中学生の段階だと思うのです。

それを受けて高等学校では、職業観や勤労観、幸福観とか人生観といった、人間としての在り方にかかわる価値観の形成に焦点を当てた指導を展開していくという流れになっていくのではないのでしょうか。

C : 中学校の授業をはじめて見させていただいて感動しました。中学校の進路指導の(高・主) 実態を踏まえて、高校での進路学習の在り方を考える上で参考になりました。

「進路を幅広くみつめる」という学習テーマの授業(資料1)でしたが、感心した点があります。それは、班別に分かれて「私の進路計画」について話し合いをさせる学習場面です。各生徒が、志望高校を選んだ理由や学校選択の条件等について、班員同士で堂々と発表し合っている姿を見て驚きました。

本来、進路は個人の問題ですから、他の人には秘密にしたいものだと思うのですが、生徒が自分の進路について、「私は将来看護婦になりたい。でも、看護学科のある高校が近くにないから〇〇高校の普通科に進学して、卒業したら高等看護学校に進むつもりだ。」とはっきり自分の考えを述べているんです。昨年度の

研究協力者が行った研究授業も素晴らしい授業だったそうですが、私のクラスでは、このような授業を行うことは難しいことです。

生徒が、クラスメート同士で、自分の進路についての希望や考えを自由に話せる背景には、学級担任の行き届いた学級経営が基盤にはあるからではないかと感心しました。高校でも、日ごろの学級経営が大切であることがわかりました。

B : 私も素晴らしい授業だったと思います。私が感心したのは、きめこまかい事前(高・主) 指導と事前準備です。

「諸先輩に聞く」ということで、事前に、先輩の高校生に進路選択にかかわって聞きたいことを班ごとに話し合い、先輩に学校に来てもらい、代表者が質問する場面をビデオ収録しておく。そのビデオを授業で活用するという学習方法は、とてもよい学習方法だと感じました。

高校でも、先輩を呼んで進路についての話をしてもらったり、先輩の体験文を学習に活用するなどの学習方法をとっていますが、ビデオを活用すれば、もっと幅広い進路学習が可能になることがわかりとても参考になりました。

D : これからの進路学習では、ビデオをはじめ視聴覚機器を活用した教材の開発は(高・主) 重要になってくると思います。

今回の授業では、先輩に中学校(母校)に来てもらい、ビデオ撮影するという形をとったようですが、他に、高校に出向いて行って、高校生活や高校生の様々な活動の状況、高校での学習内容や学科の特色等をビデオ撮影するという方法もあります。このように様々な工夫ができると思います。

中学校からビデオ撮影等の要請があれば、高校側でも積極的に協力できると思います。中学生に高校教育をよく理解してもらうことは、高校側にとってもよいことですから。

〈指導体制、組織、進路指導主事の実務に関して〉

B : 話は変わりますが、中学校には進路指導の組織や指導体制に課題を抱えている(高・主) 学校が多いと聞いています。どういう点を課題として考えているんですか？

E : 高校の先生方からは特に進路選択について、「高校を選ぶ際の指導をもっときちんとしてもらいたい。」という要望が寄せられます。中学校における進路指導の指導体制や組織等の現状について、高校の先生方にも理解していただくためにお話します。

中学校の進路指導の課題については、本研究の中間報告書にもまとめてありますが、学校の規模や教員数にもよりますが、進路指導主事が3学年の担任団から出て、1年交替で毎年のように入れ変わる学校がまだ多いのです。したがって、進学指導中心にならざるを得ない。また、組織も進路指導部が独立していません

たり、進路指導部員がいないという学校もまだまだ多いのです。いわゆる、中学校における進路指導は学年主導型なのです。

このような現状は少しずつ改善されてきていますが、もっと改善を急がなければならないと考えています。このままですと、進路指導主事が進路指導推進のリーダーシップを発揮することができないと思っています。

D (高・主) : なるほど、わかりました。高校の場合は、学校規模や普通高校か職業高校かによって多少の違いはありますが、進路指導部は、校務分掌の上で重要な指導部門として位置づけられています。部員も十分とはいかないが数名配置され、各学年との連絡調整がスムーズにいくよう配慮されています。進路指導主事も、まず1年で交替するということはありません。進路指導は、豊富な生徒指導の経験と産業界や上級学校などの知識と情報に精通していなければ適切な指導ができませんからね。

中学校でも、生き方指導としての進路指導の推進が、絵に書いた餅にならないためにも、進路指導の組織と指導体制を確立することが重要だと思いますね。

中学校の進路指導は学年主導型が多いということですが、進路指導主事の役割や実務はどうなっていますか？

F (中・主) : 私もこの研究にかかわったことを機会に、進路指導主事は、どういう役割を果たすのか、どのような実務があるのかを研究してみようと思い、進路指導主事として1年間に行った実務内容(資料2)を記録してみました。

実務内容を記録しながら気づいたことがあります。たしかに、中学校でも進路指導主事の実務はたくさんあり忙しい仕事です。しかし、実務の大部分は、毎年同じ時期に行う外部向けの事務的な仕事であり、しかもその多くは、3年生にかかわる実務で、1、2年生の指導に関する実務は少ないということです。

私は、外部に目を向けていて、学校の内部、つまり、生徒の指導や先生方の指導の在り方には、あまり目を向けてこなかったのではないかと思います。各学年との連携もとってはいますが、1、2年生の進路指導については、3学年と比べると、連携が弱かったのではと反省しているところです。これでは、進路指導主事が、進路指導を推進する中心的役割は果たせないなと思いました。

E (中・主) : 私は進路指導主事2年目ですが、同じことを感じています。これからの進路指導主事は、事務的業務や外部との連携だけでなく、もっと生徒や先生方に目を向けた企画や計画を検討する必要があると思います。

例えば、生徒の進路意識や進路発達の実態把握、進路学習に必要な資料・情報の収集、進路学習の研究授業の実施、教育相談活動の推進、進路指導に関する職員研修や保護者の研修、進路指導の評価と改善に関することなどもっとたくさんあると思います。

今、私が特に必要であると考えているのは、各学年や学級担任がどのような指導を行っているのかを記録しておくことです。先生方の中には、優れた指導を実践している学級担任がたくさんおられます。その先生方がどういう教材や資料・情報を活用して、どのような授業を実践したかという指導実践内容をストックしておくのです。そうすれば、新しく赴任された先生や若い先生方にも参考になり、助言や援助もできます。

D (高・主) : お話のあったことは、高校の現状にもあてはまることだと思います。高校における進路指導主事の役割を考える上でも参考になる点だと感じました。

進路指導の校内研修会や保護者研修会等を考えると、どうしても進路指導主事が前に出て先生方や保護者に対し、何か有益な話をしなければいけないと思うと気が重くなる。時と場合によっては進路指導主事は立場上、生徒や先生方、保護者に進路に関する話をしなければなりません。しかし、これからの進路指導主事の役割には、進路指導推進に役立つ諸活動を企画したり計画したりする創造力とか企画力が求められてくるのではないかと考えます。

F (中・主) : 私の学校ではじめて「子どもの進路を考える保護者研修会」(資料3)を開催しました。3学年のPTA役員会に働きかけてPTA主催という形をとり、教職員の研修も兼ね、本研究スタッフの指導主事の先生に講演をお願いしたわけです。

ご承知のように、業者テストの廃止や高校入試制度の改善という進路指導の転機を迎えていますので、保護者の関心も高くとても好評でした。後で保護者の方々に感想を書いていただいたのですが、「これからもこういう研修を多く開催してほしい。」「研修会や進路通信等を通じて、先生と保護者が一緒になって子どもたちの進路を考える機会をもっと多く設定すべきだ。」「この研修会を契機にして、家庭でも子どもと将来の生き方について話し合うようになった。」等の意見や感想が多く寄せられ、保護者の気持ちを把握することができたと思います。保護者と協力して進める進路指導の基盤になった研修だったと思っています。これからも、進路指導推進のために、研修や研究の企画や計画を考えていきます。

〈進路指導の評価に関して〉

B (高・主) : 進路指導主事の役割で大切なことに評価の問題があると思います。進路指導をどう評価し、改善に向けていくかということは難しいことだと感じています。

計画のないところに評価なし、評価のないところに改善なし、改善のないところに発展なしということで、私自身が評価されるような気持ちでしたが、進路指導の推進のためにと考え、「進路指導の全体評価」(資料5、6)をアンケート方式で先生方をお願いしてみました。

生徒の実態や学校の特色等を考慮して、評価項目をどうするか迷いましたが、

本研究スタッフの先生方の協力を得ながら、評価項目の内容等には不十分な点がありますが、15の評価項目を設定し、それぞれ5段階で評価してもらいました。評価結果を見ますと、評価の観点には個人差があるにせよ評価の低い項目がまだまだ多くあります。しかしこの評価によって、改善の方向性が見えてきたように感じています。

E : 進路指導の評価については、中学校の方がもっと大変ではないかと思います。
(中・主) 何をどう評価するのかという観点については、先生方の共通理解がまだできていない学校が多いのではないかと思います。したがって、進路指導の評価というと、高校入試の結果の善し悪しだけで評価してしまっている場合もまだあるのではないのでしょうか。

私の学校でも、高校と同じ15の評価項目に基づいて「進路指導の全体評価」を実施しました。結果は思っていたとおり散々なものでした。中学校の場合は、評価の結果よりも15の評価項目について考えることによって、進路指導の評価にはどのような観点があるのか、進路指導を推進するには、どのような条件があるのかといった基本を、先生方に理解してもらったことが意義深いことであったと思います。しかし中学校の進路指導でも、計画・実施・評価・改善の指導を軌道に乗せていくことが、進路指導主事の大切な役割になってくると感じています。

G : 進路指導の評価に関しては、学級担任にも同じことが言えると思います。担任
(中・担) としては、生徒をどう評価していくかが問題になってきます。

生徒の評価については、ややもすると、指導の結果としてあらわれる学習成績の推移や希望どおりの高校に合格できたかどうかだけで評価してしまう傾向があると思います。そのことも大切ですが、指導の過程における進路発達の成熟の度合いを、きちんと評価していくことが大切であると感じています。

生徒の評価に関しては、本研究で昨年から研究してきた「生徒の進路に対する意識、意欲、態度等の変容の記録」(表2, 3)で用いている10の評価の観点がとても参考になると思いました。評価の観点は、言い換えれば、どういう観点到ち進路指導を行えばよいかという指導の観点ということでもあります。

私達は、学業成績の推移だけに目を向けることなく、日ごろから、もっときめこまかく生徒を観察し、進路に対する意識、意欲、態度等が高まっていくように指導、助言、援助を行う必要があると思います。このことが、生徒の学習意欲の高揚にも結びついてくると思います。そのためにも、これからは、教育相談等による個別指導が重要になってくると感じます。

中・高が協力して進める進路指導について

〈中・高の連携の必要性に関して〉

H : 生徒指導面の中・高の連携に比べると、進路指導面での協力は、絶対に必要だ
(高・担) とは思っているのだけれど、お互いに遠慮があったりしてなかなか進まなかったのではないかと思います。しかし、生徒の進路課題の発達段階からみても、中・高一貫して協力しながら指導していくことが、これからますます大切になってくると感じています。

中・高一貫した進路指導を推進するという立場から言えば、中学校では、生徒が、高校に進学してからどのように成長していったのかというところまで、関心を持って見極めていくという責任がある。高校では、中学校から引き受けた生徒が、どのように成長して社会に巣立っていったかを、きちんと知らせる責任がある。このような考え方に立つことが、中・高の協力を推進する基盤ではないでしょうか。

A : これからは、「学校選択の進路指導から生き方指導の進路指導」へと質的転換
(中・担) を図ることが求められていますが、生徒に対して、将来の生き方の自覚を促す指導をすると言っても、生徒にはなかなか将来の生き方のイメージが湧いてこないのです。つまり、身近に生き方のモデル的存在が少ないのです。基本的には、教師自身や保護者の生きざまが、生徒にとっては、生き方を学ぶ最も適した教材であるという自覚を持って指導に当たる必要があるのでしょうか。生徒には、身近に感じる先輩の生き方が指導のよい教材になると思うのです。

内申書やテストの成績がこれぐらいだったら〇〇高校の〇〇学科に合格できるという、進路選択にかかわる資料も先輩の残した貴重な財産ですが、それよりも、先輩達が、将来の生き方や職業について、どのようなイメージを描きながら高校に進学したのか、高校入学後、どのような高校生活を送り、将来の生き方の考え方や職業の捉え方がどのように変化したのか、そして、どのような生き方を目指して就職したり進学したのかといった、先輩達の人間としての成長の足跡が、これからの進路学習にとって大切な教材になると思うのです。

F : 話の方向が変わり申し訳ありませんが、今、生き方モデルに関連して先輩の生
(中・主) き方に学ぶ学習について、ご意見が出されましたが、私は、親の生き方に学ぶことも大切な進路学習だと思います。

先日行われた進路についての保護者研修会で、講師の先生から1, 2年生の段階での進路指導が大事だという話を聞きまして、2学年では、さっそくこの冬休みに「親の生き方調査」という進路学習の宿題を出しました。親の中・高時代のこと、進路の選択のこと、今の職業を選んだ理由や仕事の内容、やりがい、生き

がいと子どもに対する将来の希望とか夢などについて、原稿用紙5~6枚にまとめさせたのです。今、その有効活用のためにまとめているところですが、保護者も思った以上に真剣に協力してくれました。生徒にとっては、生きた進路学習になったと感じています。

G : 私も、先輩や親の生き方に学ぶための教材や資料・情報が豊富に整備されてい(中・担)けば、もっと幅広い指導が可能になってくると思います。

中学校では、学業成績と進路選択に関する資料や記録だけでなく、生徒が、3年間でどの程度進路発達が成熟してきたかを記録して高校に知らせる。そして高校では、その生徒がどこに就職したか進学したかということだけでなく、3年間でどのように活動し成長していったかを記録し中学校に知らせる。このような連携は、中・高のどちらにとっても指導上メリットが大きいと思います。

このようにして考えると、進路指導を推進する上で中・高が協力できるものはたくさんあるような気がします。

C : 中・高の連携に関連して、こんな資料や情報があれば指導に役立つのになあと(高・担)思うことが多くありましたが、それを言う機会や場所がなかったと思います。

本研究にかかわって、はじめて中学校の授業を参観することができましたし、中学校の先生方と話し合うことができました。このように、進路指導について、中・高の先生方が話し合う場をもっと多く設定することが何ととっても大切なことだと思います。学校単独で企画してもよいし、地区の進路指導部会が主催してもよいと思います。できることからやっていくべきだと思います。

その意味では、本研究において中・高の進路指導担当者が集まって話し合いを持ったことは、大きな意義がある試みであったと思っています。

〈中・高の具体的な協力の在り方に関して〉

B : 進路指導主事や学級担任の努力によっては、これだったら具体的に協力できそ(高・主)うだという事柄がたくさんあると思います。

中・高の協力の基盤になるのは、何ととっても、中学校と高校の進路指導主事同士が、顔見知りになり親しくなることではないでしょうか。今回、私達は本研究を縁にして親しく話し合うことができましたが、大部分の学校では、よほどのことがない限り、中・高の進路指導主事同士が顔を合わせることはありません。これでは、中・高の協力も掛け声だけのものになってしまいます。

例えば、中学校の進路指導主事の先生は、4月から5月頃に卒業生の進学先を訪問して進路指導主事と会うことは可能だと思います。放課後とか帰宅の途中でもいいのです。そして協力関係のパイプをつくっておく。そうすれば、中・高の心理的距離がぐっと近くなり、その後は、お互いが気軽に必要に応じた協力が可能

になっていくと思うんです。

E : 私もこの点はとても大切なことだと感じます。さっそく来年度からやってみ(中・主)たいと思います。そういう協力関係の基盤ができていれば、中学校でも様々な事が可能になってくると思います。

今、私が感じていることは、私を含めて進路指導をする先生方の勉強が足りないのではないかということです。生徒や保護者の多様な価値観、多様な生き方、多様な進路選択、多様な職業(職種)希望などに十分対応できない現実があるのです。例えば、将来の生き方や職業、それに、高校の学科の特色とその学習内容や進路との関係など、生徒の疑問や不安などに対して自信を持って指導することがなかなかできないのです。学校にある資料だけではわからないことが多いのです。

職業に関する知識や資料・情報、それに実際の指導例は、高校のほうが豊富に整っていると思うのです。それらを、必要に応じて中学校に提供していただくことも考えられる。また、中学校では、業者テストの廃止に伴って、生徒や保護者が適切な進路選択をするための信頼性の高い資料の整備が求められておりますが、この点、進学校と言われている高校では、適切な進路選択の指導に関する資料の作り方、資料の蓄積とその活用方法、あるいはテスト問題作成の留意点などについてのノウハウを持っている訳です。それらの事柄について教えていただくことは、中学校の先生方にとってもよい勉強になると思うのです。

職業高校では学科の改編が進んでおりますが、たくさんある学科に関する詳細の知識が、指導上必要になっているのです。学校説明や学校案内などで調べることも大切ですが、実際、自分の目で確かめ担当の先生から直接いろいろ聞いた方がより理解が深まる。そこで、3学年担任の進路研修ということで、高校を訪問し勉強することも考えているんです。

D : とても積極的で成果の期待できる計画ではないでしょうか。おそらく、高校で(高・主)も、誠意を持って対応してくれるのではないのでしょうか。

F : 進路指導とかかわって、不本意入学意識、高校生活への不適応、高校中途退学(中・主)などの問題が中学校でも話題になっています。

これらの問題は、先生や保護者が高校教育をよく理解していないということにも問題があると思います。生徒は、自分が志望する高校について、十分に理解して納得し自信を持って入学していくという姿が望ましいのですが、高校に入学してから「こんなはずではなかった。」「厳しすぎる。」「おもしろくない。」などの不満が出てくることがあるのではないかと感じています。

中学生に高校について理解を深めさせるために、高校側で作成している学校説明や学校案内などを工夫していただくことが大切ではないかと思っています。学校案

内をカラー版にしたり写真を多く使ったりしている高校も出てきましたが、もっと多くの高校で取り組んでいただきたいものです。この点では、私立高校の方が、工夫の仕方が上手だと思います。

各高校で「ビデオによる学校紹介」を製作することを検討してみてもどうでしょうか。学校の特色や学科、学習の内容だけでなく、高校生活の過ごし方、部活動の状況、校則の内容、学校行事や催し、進路状況などの内容を中学生向きに紹介するビデオ。お金をかけた立派なものでもよいのです。中学生の進路学習用ビデオですから、先生方の手づくりのもので十分です。それをダビングして関係する中学校に提供していただくのです。

A : これは素晴らしい計画ですね。学校紹介のビデオ版があれば、学年でも学級で(中・担)も、また個人的にも活用できますし、進路相談にも大いに役立つ強力な教材になりますよ。2年生でも活用できますし、また、保護者の研修にも活用できます。中学校でも進路学習が幅広くなり深まった指導が展開できると思います。各中学校に各高校の学校紹介ビデオが整っている。このことは、中・高連携に基づく進路指導の推進にとっては、是非とも必要なことだと思います。

H : 最近では「ビデオによる学校紹介」を製作している高校も増えてきています。(高・担)しかし、私も、中学生の進路学習用の教材として活用できるようなビデオの製作については、もっと多くの高校で積極的に取り組む必要があると感じます。学校紹介のビデオ版をまだ作っていない学校でも、先進的な高校を参考にすれば、十分可能な企画だと思います。

本研究では、昨年から特定生徒の進路の意識、意欲、態度の変容について、追跡調査を行っていますね。私のクラスには、中学時代に追跡調査の対象になった生徒が在籍しています。

その生徒が中学生の頃、自分の将来の生き方、職業の希望や進路計画をどのように考えていたのか、その計画に対する学級担任の所見や保護者の気持ちはどうだったのかなどについてまとめた「進路選択と進路計画の検討」(資料4)を、中学校の担任から提供していただきましたが、この資料は、生徒を理解する上で大いに役立っております。入学早々、その生徒に「将来は看護婦を希望しているんだってね。中学校の担任の先生も両親も応援しているようだから、目標に向かって頑張れ!」と励ましてやることができました。その生徒も、入学したばかりなのに、担任は何故自分の将来の希望を知っているんだろうと不思議そうな顔をしていましたが、その生徒とは、早い時期から望ましい関係を築くことができたようです。これも中・高が協力できる実践例だと思います。

F : 進路指導において中・高が協力できる内容としては、これまでに出版された「学(中・主)校紹介ビデオ」の製作、「高校訪問・見学による中学校教員の研修」「生徒の進路

指導資料の提供」の他には、先輩の生き方に学ぶ進路学習の教材づくりへの協力(学級活動での進路学習教材づくりへの協力、高校1年生と中学校の担任と話し合う場の設定、中学校の先生への手紙や進路に関する体験記の提供、卒業生と進路を語る会への参加協力など)、中・高が相互理解を深めるため情報交換(生徒手帳、学校新聞、生徒会新聞、進路だより、PTA新聞、進路状況、生徒の活躍などの中・高相互の情報提供)等が考えられると思います。また、本研究で試みた進路学習の中・高相互の授業参観と話し合いも、やろうと思えば企画できると思うのです。

B : 生徒一人一人が、人間としての在り方と職業を持った社会人としての望ましい(高・主)生き方を旨とし、逆境に立たされた時でも主体的に進路を選択して、たくましく生き抜いていくことができる力を身につけさせることが、進路指導の目標です。

その進路指導の目標を達成するためには、中・高の協力が欠かせない。ところが、中・高連携の部分が最も遅れていたと思うのです。私達も、本研究にかかわったことによって、中・高が協力し、いくつかの指導を実践してきました。しかし、まだまだやろうと思えばやれることがたくさんあることがわかった訳です。

進路指導主事は、職員会議や校内研修会などで、進路指導における中・高の連携の大切さと必要性を啓蒙すべきだと思います。そして、できることから実行していく。一つの企画が成功すれば、その後はどんどん進んでいくと思います。このことが、在り方生き方指導としての進路指導の推進にとって、大きな力になっていくのではないのでしょうか。

ウ 上記の記述の中に下線部で示した研究実践の概要は、研究実践資料として次に記載した。

米沢市立第六中学校本時の指導計画及び授業展開の流れ

米沢市立第六中学校 3年1組 学級活動学習指導案

11月25日(木) 5校時

指導者 教諭 渡邊 節子

生徒数 男子13名 女子13名

1 学習テーマ 「進路を幅広く見つめる」

2 指導のねらい

- (1) 進路を幅広く見つめることにより、進路選択のための大切な条件を明らかにし、より明確な目標をもって最終的な進路を自ら選択できる能力を養う。
- (2) 中学校生活の残りの期間、全力を尽くして学習に向かおうとする意識を高める。

3 学習の内容

- (1) 今まで学習してきたことを振り返る。
「2年時夏休み職場見学」「修学旅行」「進路の選択に備えて」「自分について考えよう」「～になるには調査」「職場体験」「高校調べ」「高校入試説明会」そして三者面談等を通して、進路希望については、その理由も含めてかなり具体的にってきていることを確認する。
- (2) 進路をもう一度、幅広く見つめてみる必要があることを知る。
高校の中退者が多い現状を知らせ、その理由を考えさせる中で、進路選択の重要性と遠い将来の目標に向かうためには、色々な道筋があり、幅のある考え方をしていくことが重要であることを感じ取らせる。
- (3) 進路選択のための大切な条件を考える。
必要と思える条件をたくさんあげさせ、その中から特に大切と思えることを絞らせる。また、見直しが必要と思われることについては、具体的な見直し例を作らせ、目標に向かって進むには、多様な考え方ができることを意識させる。
- (4) 先輩の経験談を聞く
先輩の経験談を聞くことにより、進路決定をするのはあくまでも自分自身であり、そのために大切なことは何なのかを更にはっきりさせるとともに、いま、現在をどう過ごしたら良いのかを考えさせる。
- (5) 感想を書く
最終的な進路決定までの心構えや、中学校生活の残りをどう過ごすかということを中心にまとめさせる。

4 展開の形態

- 学習内容 (1)(2) …… 教師主導で話をする
(3) …… 班毎に話し合いをさせ、考えさせる
(4) …… ビデオ視聴をする

(5) …… 個人ごとに深く考えさせる

5 事前の指導と生徒の活動

「諸先輩に聞く」…先輩に聞いたことを各班で話し合い、それをもとにして代表者が質問する形でビデオに収録する。

「私の進路計画」…現在考えている希望を事前にプリントにまとめておく。

6 授業展開の流れ

学習内容	教師の働きかけ	生徒の学習活動	指導上の留意点
1 今まで学習してきたことを振り返る。	今まで進路について学習してきたことをまとめ、そのことを通して、それぞれの現在の希望があることを確認させる。	学習内容を振り返ることにより、現在の希望の理由をはっきり意識する。(特に志望校を選んだ理由について)	常に将来の生き方を考えながら、各自の進路を考えてきたことを強調する。
2 進路をもう一度幅広く見つめる必要があることを知る。	高校中退者の多い現状を示し、自分の進路をもう一度見つめてみることを促す。	中退をする理由を考える中で、進路選択の重要性と多様な考え方の必要性を知る。	安易な選択、目的意識をもたない入学が、中退に結びつく要因になっていることを引き出したい。
3 進路選択のための大切な条件を考える。	「私の進路計画」の中から志望校を選んだ理由を、班の中で話し合わせその中から、大切な条件を考えさせる。見直しの必要な点をあげさせ、その中のいくつかを、具体的に検討させる。発表させる。	できるだけ多くの項目をあげ、その中から特に大切だと思えるものを絞る。 見直しの具体例を作ってみる。 発表する。	自由な雰囲気の中で、多くの項目があがるよう机巡視をしながらアドバイスをする。 見直しを図る際に、大切にしなければならぬことを意識させながら話し合わせる。
4 先輩の経験談を聞く。	先輩の話を聞いて参考にすることを促す。	先輩の経験談を聞くことにより、自分のことと重ね合わせて考え、現在の在り方、進路決定に向けての心構えなどを意識する。	先輩は、社会人、高校生(学年、高校も色々)というように多方面にわたるように配慮する。
5 感想を書く。	最終的な進路決定までの心構えや、中学生生活の残りの期間をどう過ごすか、ということを中心にまとめさせる。	今日学習したことをもとに、自分の考えを作文に表す。	次回の三者面談までに、各自の進路計画をもう一度幅広く見つめた上で、最終的な進路の選択を保護者と共に、考えていくことをつけ加える。

7 評価の観点と方法

- (1) 最終的な進路選択にいたるまでの大切な要因についての理解が深まったか。
(作文、観察)
- (2) 中学生生活の残りの期間、全力を尽くして学習に打ち込もうという意識が高まったか。
(作文、観察)

資料 2

月	進路指導主事の	備 考
4 月	・年間進路指導計画立案（学校全体） ・学年進路指導費予算編成 ・平成6年3月新規学校卒業予定者	・市学力自己診断テスト2 ・地区学力自己診断テスト
5 月	・高校奨学生予約募集連絡 ・第三学年担任報告（A高）	・地区公立高校入試要項説明会・高校協議会 ・教科担任者会
6 月	・在籍生徒数報告（B高） ・第1回進路希望調査集計 ・専門学校来校（C専） ・一日体験入学案内受付（D高・E高） ・補充学習実施要項提出 ・夏期セミナー紹介	・総合実力テスト1 ・総合実力テスト2 ・三者面談
7 月	・体験入試案内（F高）・体験入学案内（G高） ・山形県公立高校入試改善に対する ・夏期セミナー受講希望者申し込み ・学校説明会出席（G高）・高校来校 ・一日体験入学案内受付・申込み（H高） ・夏期補充計画・学習内容表作成・ ・保護者会資料作成	・総合実力テスト3 ・三者面談 ・総合実力テスト4
8 月	・求人案内受付（K社） ・第二学期進路指導計画立案 ・補充新学期編成	・三者面談 ・総合実力テスト5
9 月	・進路指導主事事務打合せ会出席（ ・第2回進路希望調査集計 ・平成6年度入学山形県公立高等学 ・第三学年保護者進路研修会実施・ ・高校事務担当者立案提示 ・専門学校来校（C専）・体験入学 ・山形職安打合せ会出席	・卒業式 ・公立高校合格発表

進路指導主事の実務の記録（中学校）

月	進路指導主事の実務の内容	備 考	月	進路指導主事の実務の内容	備 考
4 月	・年間進路指導計画立案（学校全体、学年） ・学年進路指導費予算編成 ・平成6年3月新規学校卒業予定者の求職動向報告	・学年理事会 ・学年保護者	10 月	・高校・専門学校来校（O高・P高） ・入試問題集注文 ・体験入学案内受付（Q高・R高） ・地区高校説明会出席報告連絡 ・高校入試説明会出席（M高）	・市学力自己診断テスト2 ・地区学力自己診断テスト
5 月	・高校奨学生予約募集連絡 ・第三学年担任報告（A高）	・修学旅行	11 月	・高校来校（Q高・A高） ・学校説明会出席報告（S高・G高・O高・R高） ・入試事務連絡（T高・U高） ・学校説明会出席（D高） ・12月年末年始中の候補計画立案 ・基礎資料（5段階評定・観点別評定）用紙作成・配布 ・入試制度の改善説明、進路指導の全体評価依頼（職員会） ・V専門学校出願書類発送 ・U高校懇談会出席	・地区公立高校入試要項説明会・高校協議会 ・教科担任者会
6 月	・在籍生徒数報告（B高） ・第1回進路希望調査集計 ・専門学校来校（C専） ・一日体験入学案内受付（D高・E高） ・補充学習実施要項提出 ・夏期セミナー紹介	・学年PTA役員会 ・進路対策委員会 ・市学力自己診断テスト1	12 月	・合格祈願祭参加 ・三年激励会実施 ・入試説明会（F高） ・三者面談実施計画・案内状作成 ・補充新学級編成 ・基礎資料回収 ・私立高校事前相談実施	・総合実力テスト1 ・総合実力テスト2 ・三者面談
7 月	・体験入試案内（F高）・体験入学希望申し込み（D高） ・山形県公立高校入試改善に対する意見書提出 ・夏期セミナー受講希望者申し込み ・学校説明会出席（G高）・高校来校（B高・H高） ・一日体験入学案内受付・申込み（I高・J専） ・夏期補充計画・学習内容表作成・補充学級編成 ・保護者会資料作成	・保護者会	1 月	・進路検討会資料作成 ・進路検討会実施（学年・学校全体） ・成績一覧表作成・提出 ・公立高校推薦入学者選考 ・私立高校事前相談実施	・総合実力テスト3 ・三者面談 ・総合実力テスト4
8 月	・求人案内受付（K社） ・第二学期進路指導計画立案 ・補充新学期編成	・中学校進路指導研修会 ・県中学校学力自己診断テスト1	2 月	・私立高校入試付添・配車計画 ・国立高専出願 ・公立高校推薦入学・推薦書提出、面接付添 ・公立高校願書指導・提出 ・専門学校入試付添計画 ・公立高校調査書・成績一覧表提出 ・補充閉講式実施	・三者面談 ・総合実力テスト5
9 月	・進路指導主事事務打合せ会出席（職安） ・第2回進路希望調査集計 ・平成6年度入学山形県公立高等学校進学希望者数報告 ・第三学年保護者進路研修会実施・感想文依頼 ・高校事務担当者立案提示 ・専門学校来校（C専）・体験入学受付（L高・M高・N高） ・山形職安打合せ会出席	・県中学校教育研修会進路指導部会地区代表会	3 月	・国立諸学校諸否報告 ・公立高校入試付添・配車計画 ・入試事後指導	・卒業式 ・公立高校合格発表

保護者と協力して進める進路指導に関する実験研究の概要 「保護者の進路研修会」を開催して

天童市立第四中学校

1 研修会のねらい

「今年の学校の進路指導は大丈夫なのか?」「わが子の合格可能な高校について、学校は何を基にどんな指導をしてくれるのか?」業者テストの廃止や公立高等学校入試制度の改革の情報など、さまざまな大きな変化を耳にすることによって、4月以来、親たちからは保護者会やPTA 理事会のたびごとに、同じような疑問や心配が数多く出されるようになった。

学校で行う進路指導についても、単なる学校選択の進路指導から、自己の個性を知り、将来の職業生活・社会生活を通じて、よりよく自己を生かすための生き方指導の進路指導へと、その基本的な在り方が変わろうとしている。

このような状況から、学校が保護者と協力して生徒の指導を進めていくために、学校・保護者が、子どもの進路をどう考えていけばよいのかについて、改めて共通の理解を深め合うことが不可欠のこととなってきた。

そこで、3学年PTA 進路対策委員会が中心となって、3年生保護者の進路研修会を開催することになった。

2 実施計画

- (1) 目的 中学生の進路について研修し、子どもの進路指導に対する保護者の理解を深める。
- (2) 日時 平成5年9月25日(土) 14:00~16:30
- (3) 場所 天童市立第四中学校 3階ラーニングセンター
- (4) 日程
 - ① 開会のことば
 - ② 学年部長の挨拶
 - ③ 学校長の挨拶
 - ④ 講話 「中学生の進路を考える」
—— 子どもに望ましい高校生活を送らせるために ——
講師 山形県教育センター 指導主事
 - ⑤ 説明 「生徒の現状とこれからの課題」 3学年主任
- (5) 質疑応答
- (6) 閉会のことば

3 講話の概要(項目のみ記載)

- (1) 進路指導の意義と目標 (2) 子どもの進路実現にむけての意欲の形成 (3) 子どもに期待する資質・能力 (4) これからの学校教育 (5) 生涯教育と学校教育 (6) 高校入試制度の改善 (7) 子どもたちの実態 (8) 進路指導の現状 (9) 進路指導の諸事例に学ぶ (10) 子どもの進路について保護者が考えたいこと

4 まとめと課題

当日は、保護者の65%が出席し、この問題に対する関心と意識の高さが感じられた。

保護者の感想や意見をみると、業者テストの廃止や入試制度の改善に対して、考え方としては理解しても、現実的には深刻な問題と受けとめている保護者が多いことが感じ取られる。改革の初年度でもあり、改革の動きと現実の状況との間には、まだ相当の格差があるように思われる。

— 35 ~ 36 —

② 進路指導の評価について

進路指導の推進・充実・改善のためには、適時、指導についての適切な評価を行うことが大切である。進路指導に関する評価には、全教職員が行う全体評価、進路指導主事が行う評価、各学年が行う評価、学級（HR）担任が行う評価、そして、生徒自身が行う評価等が考えられる。

本研究では、進路指導の全体評価の実施に関して、研究協力学校に協力を得て実践研究を行った。「進路指導の全体評価の観点と内容」及び全体評価を実施した結果については、資料5及び資料6（pp.39～42）として記載した。全体評価の実施結果については、次のようにまとめた。

ア 調査について

15の評価項目は、進路指導全般にわたり質問しているが、評価の客観的基準を示している問いではない。むしろこの結果は、評価者である教員が、進路指導の各領域についてどのように理解し、どのように判断したかが表現された値としてみるができる。

また、調査対象が研究協力学校の教員であることから、この結果が山形県の平均像という訳にはいかないが、進路指導に対して抱いている意識の傾向をみるには、十分信憑性があると考えられる。

イ 中・高ごとの概要

進路指導の総合評価は、中学校教員では2.8であり、高等学校教員では3.4である。5段階評価の基準の2が「改善すべき点が多い」、3が「行われているが十分ではない」である。このことから、中学校の方が今後の改善点を多く見出ししており、高等学校では、不十分ながら行っているという意識の違いが読み取れる。

ウ 中・高の共通点について

(ア) 共通して評価が高い項目

「担任が一人一人の生徒に対し、進路指導上の課題に適切に援助しているか。」という質問に対し、中学校では3.4、高等学校では3.5という高い評価結果であった。特に中学校では15項目中最も高い数値であった。担任が、生徒に対してきめ細かく指導している様子がうかがえるが、生徒の進路発達を踏まえ、段階的・継続的指導になっているかどうかを考えなければならないだろう。すなわち、1年生の段階から、学期ごと、学年ごとに観察・評価を積み重ねることで、生徒の進路課題を総合的に把握し、一人一人の生徒の将来の生き方に迫る進路指導が可能になると考えられる。

高等学校の場合も事情は同じであるが、多くの学校で、2年生から選択教科、コース分けの機会が増えたことで、1年生の段階から、卒業後の進路や将来の生き方を見据えた指導が必要になってきていることを配慮し、1年生での進路指導をいっそう重視すべきであろう。

(イ) 共通して評価が低い項目

学習指導と進路指導の関係については、「担任と教科担当が連絡を取り合いながら、担任は個々の生徒の学習状況を把握し、教科担当は教科を通して進路指導を展開しているか。」という質問に対しては、中学校が2.7、高等学校は3.0という低い評価結果が出た。特に、高等学校では15項目中最低の数値であった。

学年単位で、担任と教科担当の連絡会(情報交換会)を設定する場合、教科担当は、必ずしも当該学年の所属とは限らないので、おのずと多くの参加者で構成されることになり、その運営は容易ではない。したがって、進路指導部が中心となり、十分調整しながら準備・運営に当たることが必要になってくる。

連絡会を通じて教科担当は、一人一人の生徒を総合的に理解を深める機会が与えられ、その後の教科指導に生かすことができるであろう。また担任は、個々の生徒の教科の取り組みや教科担当との触れ合いの様子をうかがうことができ、生徒について、より公正で客観的な情報を得ることができ、生徒理解や総合的な進路指導に役立てることができるであろう。

エ 中・高の相違点

(ア) 中・高の評価のズレが最も大きいのは、「進路指導室、情報資料室、進路相談室などの進路指導の施設・設備の充実・活用の状況」で、中学校が1.9、高等学校が3.2の評価であり、その差は1.3(26%)であった。いずれの値も総合平均値を下回っており、特に中学校においては、施設・設備の充実を望む声が大きいがわかる。

この数値結果は学校によって異なる。調査対象校の中には、古くて手狭な校舎が含まれていることも原因の一つであると考えられるが、進路指導室のない中学校や進路相談室のない高等学校はまだ多い。

(イ) 15項目中2番目にズレが大きかったのは、「校務分掌としての進路指導部員の役割が明確であるかどうか、また学年や他の分掌組織との協力関係ができていくかどうか。」の質問であり、中学校が2.5、高等学校が3.5の評価で、その差は1.0(20%)であった。

中学校においては、学年だけに依拠することなく、複数の部員から成る進路指導部を組織し、進路指導主事が中心となり、3年間を見通した進路指導を推進していくことが、進路を取り巻く教育環境の変化に対応し、進路指導の充実・改善を図るためには、今後の重要な課題であろう。また、指導体制をいっそう強化していくためには、教員の研修や時代の流れをつかもうとする意識改革が求められよう。その具体的な進め方については、高等学校の運営が参考になろう。

資料5

番号	評価項目	評価の観点
1	目標の設定	学校の教育目標・進路目標があること。 目標を指摘できること。 目標を述べるができること。
2	組織づくり	進路指導の組織があること。 組織が反映して作られていること。
3	現職研修	進路指導の運営に必要事項があり、進路指導主事が計画から実施・進められていること。 進路指導に関する実務が年度当初から明確になっていること。
4	主事・担任の役割	進路指導の展開に援助できる関係者(進路担当(係)が配置されていること。 進路担当(係)と、常に各分掌と連絡・協議をしていること。
5	学年、各部(課)との連携	進路指導部(課)と進路指導部などの関係が密であること。
6	指導計画の立案	進路指導の推進的・継続的内容になっていること。 計画どおり実践の進路指導計画が年間を通じて配置されていること。
7	総合的な進路指導計画	進路指導の全体像や進路事業があること。 進路指導計画の内容がバランスよく計画配置されていること。
8	進路の充実	進路指導の効果や資料集を活用していること。 進路学習で利用できる視聴覚教材等があること。
9	施設・設備の充実	進路指導に必要な相談室があり電話もあること。 相談室は、生徒が自由に資料を閲覧したり進路相談ができること。
10	計画的な進路相談	各学年・学級(科)で進路相談活動が計画的・継続的に進められていること。 進路相談活動が計画的・継続的に進められていること。
11	担任の指導・援助	学級(HR)担任が適切な指導・援助をきちんと取っていること。
12	教科における指導	担当している教科の図的に人生設計や職業観に関する教材や定や進路意識を高めること。 進路指導と教科担当の連絡会を計画的に開いていること。
13	教科担当との連携	生徒一人一人の進路指導に必要に応じて生徒の学習や進路に関する相談ができること。
14	保護者との協力と連携	家庭(保護者)に関する専門部があること。 保護者の研修事業が定期的に行われていること。 保護者研修を行っていること。
15	指導の評価と改善	学校における進路指導の評価項目を設定していること。 評価の機会を持ち改善点を明確にしていること。

〈評価の基準〉 5 → 十分に行なわれていること
2 → 改善すべき点があること

進路指導の全体評価の観点と内容

番号	評価項目	評価の内容	評価の観点
1	目標の設定	学校の教育目標に即して進路指導目標が立てられ、教育活動全体を通じ、その目標の具体化が図られているか。	●具体的な進路指導目標があること。 ●目標の記載箇所を指摘できること。 ●目標の主な内容を述べるができること。
2	組織づくり	進路指導の組織が、地域、学校、教育課程、生徒、教職員などの実態を踏まえて適切に作られているか。	●進路指導の組織があること。 ●学校の実情を反映して作られていること。
3	現職研修	進路指導の運営については、進路指導に関する研修を深めるなど、校内の全教職員の共通理解があり、協力して進められているか。	●進路に関する行事があり、進路指導主事が計画から実施・評価まで関わっていること。 ●担任の進路に関する実務が年度当初から明確になっていること。 ●1, 2学年に進路担当(係)が配置されていること。 ●進路指導主事は、常に各分掌と連絡・協議をしていること。
4	主事・担任の役割	進路指導の展開に当たっては、進路指導主事の位置付けや学級(HR)担任教師の役割が明確にされ、相互に協力援助できる関係が成り立っているか。	
5	学年、各部(課)との連携	進路指導部(課)の位置付けと部(課)員の役割が明確にされており、進路指導部が学年・学級(HR)、教務、生徒指導部などの関係分掌との間に、円滑な協力関係が成り立っているか。	
6	指導計画の立案	進路指導の推進に当たり、全体指導計画や学年・学級(HR)の指導計画など、必要な指導計画が明確に立てられ、計画どおり実践されているか。	●指導計画が段階的・継続的内容になっていること。 ●学級(HR)独自の進路指導計画が年間を通じて配置されていること。 ●生き方にかかわる進路事業があること。 ●指導領域と指導内容がバランスよく計画配置されていること。 ●進路学習ノートや資料集を活用していること。 ●学級(HR)の進路学習で利用できる視聴覚教材等があること。
7	総合的な指導計画	進路指導の全体計画は、生徒の進路発達を考慮し、自己理解、職業観と労働観の育成、将来の生活設計(進路設計)、啓発的経験(体験的な進路学習)、進路の選択決定に関する諸指導が、調和して配置し計画されているか。	
8	進路の充実	進路指導の効果的な実践のために、指導内容や指導方法が工夫され、適切な教材・教具・情報資料の開発や活用に努めているか。	
9	施設・設備の充実	進路指導に必要な施設・設備、たとえば進路指導室、情報資料室、進路相談室等が整備され、よく活用されているか。	●独立した進路相談室があり電話もあること。 ●進路相談室では、生徒が自由に資料を閲覧したり進路相談ができること。 ●進路相談期間が設定されていること。 ●1, 2学年の進路相談活動が計画的・継続的に行われていること。 ●進路指導主事は進路相談の進め方について指導できること。 ●担任は相談記録をきちんと取っていること。
10	計画的な進路相談	各学年・学級(HR)は、計画的・継続的に個々の生徒の進路相談活動を実施しているか。	
11	担任の指導・援助	学級(HR)担任は、個々の生徒の進路希望、進路目標、進路計画、進路に関する不安や悩み、問題点などを把握し、適切な指導・助言や援助に努めているか。	
12	教科における指導	担当している教科の指導を通して、生徒に対し将来の生き方にかかわる話題を提供するなどして、進路目標の設定や進路意識を高めるように指導の工夫をしているか。	●教科の授業で意図的に人生設計や職業観に関する教材や話題を提供していること。 ●各学年とも担任と教科担当の連絡会を計画的に開いていること。 ●教科担当は必要に応じて生徒の学習や進路に関する相談に応じていること。
13	教科担当との連携	生徒一人一人の進路について、学級(HR)担当と教科担当との話し合いや連携が十分にもたれ、教科の指導を通しての進路指導が発揮されているか。	
14	保護者との協力と連携	家庭(保護者)との協力関係を配慮し、進路に関する情報資料の提供、進路通信の定期的な発行、進路に関する保護者の研修事業などを適切かつ積極的に行っているか。	
15	指導の評価と改善	学校における進路指導の推進、充実・改善のために、適時適切な進路指導に関する評価が実施されているか。	●目標に合致した評価項目を設定していること。 ●定期的に評価の機会を持ち改善点を明確にしていること。

〈評価の基準〉 5 → 十分に行なわれる 4 → 行なわれている 3 → 行なわれているが十分ではない
 2 → 改善すべき点が多い 1 → 行なわれていない 0 → わからない

進路指導の全体評価のまとめ

項目 番号	評 価 の 内 容	評 定 段 階 及 び 評 価 結 果													
		中 学 校							高 等 学 校						
		5	4	3	2	1	0	評定平均	5	4	3	2	1	0	評定平均
1	学校の教育目標に即して進路指導目標が立てられ、教育活動全体を通じ、目標の具体化が図られているか。	2%	23%	49%	16%	2%	7%	3.1	8%	52%	31%	3%	5%	2%	3.6
2	進路指導の組織が、地域、学校、教育課程、生徒、教職員などの実態を踏まえてつくられているか。		23	30	35	5	7	2.8	9	52	28	5	3	3	3.6
3	進路指導の運営については、研修を深めるなど、校内の全教職員の共通理解があり、協力して進められているか。		19	33	42	5	2	2.7	9	36	44	8	3		3.4
4	進路指導主事の位置付けや学級担任の役割が明確にされ、相互に協力援助できる関係が成り立っているか。		21	35	35	5	5	2.8	11	50	30	6	3		3.6
5	進路指導部と部員の役割が明確にされており、学年、学級の指導計画など、必要な指導計画が立てられ実施されているか。		16	30	30	14	9	2.5	24	32	33	6	3	2	3.6
6	進路指導の推進にあたり、全体指導計画や学年・学級の指導計画など、必要な指導計画が明確に立てられ、計画どおり実践されているか。	2	19	40	33	7		2.8	11	34	45	8	2		3.5
7	全体指導計画は、生徒の進路発達を考慮し、自己理解、職業観の育成、将来の生活設計、啓発的経験、進路選択に関する諸指導が調和して配置されているか。	5	21	42	21	9	2	2.9	5	34	45	8	5	3	3.3
8	効果的実践のために、指導内容や指導方法が工夫され、適切な教材・教具・情報資料の開発や活用にも努めているか。	2	9	56	30	2		2.9	9	27	45	16	3	1	3.3
9	指導に必要な施設・設備、例えば進路相談室、情報資料室が整備され、よく活用されているか。		5	19	37	35	5	1.9	9	34	31	19	3	3	3.2
10	各学年・学級とも、計画的・継続的に個々の生徒の進路相談活動を実施しているか。	7	30	51	9	2		3.3	12	31	42	8	3	3	3.4
11	学級担当は、個々の生徒の指導希望、進路目標、進路計画、進路に関する不安や悩み、問題点などを把握し、適切な指導・助言や援助に努めているか。	5	37	51	5	2		3.4	9	42	38	9	2		3.5
12	教科の指導を通して、将来の生き方にかかわる話題を提供するなどして、進路意識を高めるように指導の工夫をしているか。	2	21	53	21	2		3.0	6	36	36	14	8		3.2
13	生徒の進路について、学級担任と教科担任との話し合いなどが十分に持たれ、教科の指導に生かされているか。		7	60	26	7		2.7	5	19	50	22	3	2	3.0
14	保護者との関係を配慮し、進路に関する情報資料の提供、進路通信の定期的発行、保護者の研修事業などを適切かつ積極的に行っているか。	2	26	44	21	2	5	3.0	9	31	45	11	3		3.3
15	進路指導の推進・充実・改善のために、適時適切な進路指導に関する評価が実施されているか。		12	40	35	7	7	2.6	6	33	44	6	5	6	3.3
合計		2	19	42	26	7	3	2.8	9	37	39	10	4	2	3.4

※〈評価の基準〉 5 ⇒ 十分に行なわれている 4 ⇒ 行なわれている 3 ⇒ 行なわれているが十分ではない 2 ⇒ 改善すべき点が多い 1 ⇒ 行なわれていない 0 ⇒ わからない
 ※ 調査概要 調査学校：中学校2校、高等学校2校 調査対象：学校教員 調査実施期日：平成5年10月～12月 調査数：中学校43名、高等学校64名



職場見学の様子（県立天童高等学校 平成5年）

③ 生徒の進路意識、意欲、態度等の変容について

望ましい進路指導の在り方を研究するため、本年度も昨年度に引き続き、中学3年生6名、高校1年生6名の計12名を特定し、7月から12月までの6か月にわたり、各生徒の進路に対する意識、意欲、態度等がどのように変容していくかを観察し、評価、記録した。

12名の特定生徒の進路意識、意欲、態度等の変容を評価化したものを表2（p.45）に、また変容の内容をまとめたものを表3（p.46）に示した。

ア 分析結果の考察

2年間にわたる特定生徒の進路意識、意欲、態度等の変容について、記録内容を分析した結果にみられる特徴的な点をあげてみる。

(ア) 次の表は、表2及び表3に基づき、2年間の調査の結果をまとめたものである。

項目 校種	対象人数	評価が上がった項目の数	評価が下がった項目の数	評価が変わらなかった項目の数	項目数計
中学生	14	42 (30%)	17 (12%)	81 (58%)	140
高校生	14	29 (21%)	6 (4%)	105 (75%)	140

高校1、2年生に比べて中学3年生の変容が大きいのがわかる。この傾向は、昨年度の調査結果からも同様のことが言える。

生徒の進路意識、意欲、態度等の変容は、6か月程度の短い期間では表れないし、評価もしにくいという見方もある。しかし、進路目標の実現に向かって意欲的に取り組むべき大切な時期において、評価の上昇した項目が中学3年生では30%、高校1、2年生では21%という値は少ないのではないだろうか。また、評価の低下した項目が中学3年生で12%あることは気になる点である。

教師は、生徒の進路に対する意識、意欲、態度等がより高揚するような指導の在り方について、更に研究を深めていくとともに、生徒の変容に気づく観察力を身に付け、評価の観点を明確にして進路指導に当たることが大切であろう。

- (イ) 変容の内容をみると、「当面の進路目標の設定」と、「将来に向けた進路計画の立案」に関する2つの項目の評価が上昇した生徒は、一般に他の項目の評価も良くなっている。また、2つの項目の評価が低い生徒は、他の項目の評価が低かったり下がったりしている。

このことから、進路目標の設定と進路計画の立案の状況が、進路意識、意欲、態度に大きく関わってくると考えられる。また、進路希望への満足度の度合いと保護者との希望の一致の状況が、進路目標の設定と進路計画の立案への意欲づけに深く関連していることがわかる。

- (ウ) 生徒の進路意識、意欲、態度等を高揚させるためには、進路相談を充実させることが大切であると考えられる。

進路目標、進路計画、生徒の進路希望への保護者の理解と協力は、生徒個々の将来の生き方にかかわる多様性を持つ課題である。したがって、学級(HR)活動や学年活動などによる全体指導と、進路相談等による個別指導の調和のとれた系統的な指導が大切である。生徒の進路意識、意欲、態度等の高揚を図るには、全体指導だけでは不十分であり、全体指導での意欲づけを踏まえ、進路相談で、生徒個々の進路の具体化と特殊化を図る必要がある。

表2 進路に関する意識、意欲、態度等の変容の記録(1)

		中 学 校												高 等 学 校						評 価 した 数 字 (枠内の数字は5段階で評価した数字)					
		3 年 男						3 年 女						1 年 男		1 年 女		1 年 女							
		7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月						
進路を考えようとする意識・意欲・態度はどうか。		4	4	4	4	2	2	3	4	5	5	3	4	3	3	4	2	3	3	4	4	3	3		
自己理解が十分になされているかどうか。		4	4	4	4	2	2	3	4	3	4	3	4	2	2	4	4	3	3	2	3	4	2	2	
当面の進路目標が明確になっているかどうか。		4	4	4	4	2	2	4	4	4	4	4	4	3	3	4	4	3	4	3	4	4	3	2	
将来に向けて進路計画が明確に立てられているかどうか。		2	2	4	4	2	2	4	4	4	4	3	3	2	3	3	3	2	2	3	2	4	2	2	
進路目標実現のために努力しているかどうか。		3	2	4	4	2	2	3	4	4	5	3	4	2	3	3	3	4	2	3	3	2	2	2	
進路希望(進路選択)への満足度はどうか。		4	3	4	4	2	2	4	4	5	4	4	4	4	4	4	4	3	4	3	4	4	3	3	
生徒の進路希望と保護者の希望との一致の状況はどうか。		4	4	4	4	3	2	4	5	4	3	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	2	2	2	
日常の学習活動、特別活動等への取り組みはどうか。		4	2	4	4	3	2	3	4	4	5	4	4	3	3	2	4	4	3	3	4	4	3	2	
学業成績向上の推移の状況はどうか。		3	2	4	4	3	3	3	4	3	4	4	4	3	3	2	3	3	2	2	2	2	1	1	
進路相談に臨む態度・姿勢はどうか。		4	4	4	4	4	2	4	4	5	5	3	3	4	5	3	4	3	3	4	3	3	3	3	
合 計 (50点)		36	31	40	40	25	21	35	41	42	44	34	38	30	32	33	36	29	33	27	29	34	34	24	22

表3 進路に関する意識、意欲、態度等の変容の記録(2)

	評価が上がった 人数の割合 (%)		評価が下がった 人数の割合 (%)		評価が変わらなかつた 人数の割合 (%)	
	中学生	高校生	中学生	高校生	中学生	高校生
進路を考えようとする意識・意欲・態度はどうか。	29%	29%	0%	0%	71%	71%
自己理解が十分になされているかどうか。	50%	21%	0%	0%	50%	79%
当面の進路目標が明確になっているかどうか。	21%	36%	14%	7%	65%	57%
将来に向けた進路計画が明確に立てられているかどうか。	21%	29%	0%	7%	79%	64%
進路目標実現のために努力しているかどうか。	43%	29%	7%	7%	50%	64%
進路希望（進路選択）への満足の度合いはどうか。	30%	7%	35%	0%	35%	93%
生徒の進路希望と保護者の希望との一致の状況はどうか。	29%	0%	21%	0%	50%	100%
日常の学習活動、特別活動への取り組みはどうか。	21%	14%	14%	7%	65%	79%
学業成績向上の推移の状況はどうか。	29%	21%	21%	7%	50%	72%
進路相談に臨む態度・姿勢はどうか。	21%	29%	7%	0%	72%	71%

※平成4、5年度の記録を合計したもの
 ※調査期間は7月から12月までの6か月間
 ※調査対象生徒は、中学校14名、高校生14名

(エ) 進路相談は、将来の生き方や希望、進路目標、進路設計、努力目標や努力内容、保護者の進路に対する希望や考え方、進路に関する悩みや不安などについて、生徒自らが進路課題を発見し、自らの力で課題解決を図っていくことができるよう、指導・助言、援助する重要な教育活動である。しかも、その後の指導過程において、生徒の課題解決の状況を把握しながら、励ましを与えたり、進路計画に修正の必要が生じた場合や新たな課題が発見された場合には、その都度対応しなければならない。また場合によっては、生徒の課題解決のため、保護者との進路相談の回数を重ねる必要も生じてくる。

生徒個々の進路発達には個人差があることを考慮すれば、生徒一人一人が、進路課題を発見して自分の力で課題の解決を図っていくには、長い時間を必要とする。したがって、教師には、時間をかけて、生徒の課題解決への取り組みの状況を見守り支えていくという指導姿勢が求められる。

進路相談は、生徒の入学時から計画的・継続的に行わなければならない。進路の選択・決定を目前に控えた最終学年においては、進路相談を充実させることは当然のことであり、どの学校でも行っているところである。大切なことは、1、2年生の段階における進路相談活動を充実させることにより、早くから自分の将来の生き方や進路に対する関心や意欲を高め、進路課題の解決に向けて積極的に取り組む態度を育てることである。そのためには、3か月に一度程度は、進路相談の機会を設定することが望ましいと思われる。



先輩と進路を語る会の様子（県立米沢東高等学校 平成5年）

イ 分析結果のまとめ

- (ア) 教師は、生徒を生活全般にわたり観察し、生徒の少しの変化に対して、進路相談等の個別指導による適切な指導・助言、援助、激励を行うことにより、生徒の進路に対する姿勢は、望ましい方向に変容していくものと考え。
- (イ) これからの進路指導で特に大切な指導の観点は、生徒一人一人に対し、将来の職業人としての生き方に根ざした進路計画（進路設計）を立案させ、その進路を実現するため、当面の進路目標を早期に持たせる進路指導を推進することである。
- (ウ) 生徒が進路発達に応じ、中・高校生なりに、将来の生き方を踏まえた進路計画を立て、進路実現に向けた目標を明確にすることは、学業成績の向上や、学校生活の諸活動に対する望ましい取り組みの姿勢の形成にも結びついていくことが、分析結果からみて明らかである。
- (エ) 進路指導における生徒の評価は、学校の教育活動全体を通じて、生徒が、将来のよき社会人、職業人をめざした人間としてどれだけ成長してきたかという、進路発達の成熟の度合いを評価するものである。したがって、評価が難しく、評価のしにくい指導領域である。

在り方生き方指導としての進路指導において、生徒を正しく評価するためには、次の点が大切であると考え。

- a 進路指導によってどのような生徒を育成するのかといった“進路指導が目ざす生徒像”を明らかにすること。
- b “進路指導が目ざす生徒像”に近づけるための具体的な進路指導目標を明確にし、指導目標に基づき、分かり易い評価の観点を設定すること。
- c 学校教育全体を通じて行う進路指導に、系統性・計画性を持たせるために、評価の観点の中に次の2つの観点（進路発達の成熟度の評価）を位置づけること。

① 生徒が、進路発達に応じて、将来の生き方に根ざした進路計画（生活設計）を立てることができるまでに、どの程度成長してきているか。

② その進路実現に向けた当面の進路目標を具体化・特殊化できるまでに、どの程度成長してきているか。

教育活動全体を通じ、①、②に焦点を当てた指導・助言、援助、激励を意図的に継続することが、生徒の進路に対する意欲のみならず、学習活動や学校生活全般に対する取り組む意欲・態度の高揚にも結びついていくことが期待される。

- (オ) 評価の観点を共通にし、指導の焦点をしばり込むことにより、指導の内容と方向性がより明確になってくるものと考えられる。

“進路指導が目ざす生徒像”と“進路指導の評価の観点”が明確に位置づけられていない学校の中には、本来、目標達成に向けて計画された系統的指導であるべき進路指導が、進路指導部、学年、学級（HR）担任、教科担当が行う進路指導が、各々ば

らばらな状態で行われており、指導することが目的化されて、“指導すればそれで終わり”というやりっ放しの指導に陥っているという指摘がある。

このような課題を克服するためには、評価の観点を具体化し、全体の指導計画に位置づけるなど、教師全員が共通して指導ができる条件を整えることが必要である。

IV 研究のまとめと課題

1 研究のまとめ

本研究では、3年間、中学校における「生き方」・高等学校における「在り方生き方」教育にかかわる進路指導の考え方とその望ましい進め方を追究してきた。基礎理論の研究、学校現場の実態調査、研究協力者による実践研究を通して、次のように研究をまとめることができる。

(1) 在り方生き方指導としての進路指導の観点について

- ① 人間としての在り方生き方に関する教育は、小・中・高一貫して、新しい学校教育の方向性を示す教育理念である。
- ② これからは、目標達成型の進路指導から進路探求型の進路指導へと、指導の観点を転換していかなければならない。

ア 今までの進路指導は、生徒の当面の進路選択とその進路実現を目標とし、その目標を達成するための指導に重点を置いた指導であったと考えられる。そして、進学指導こそが進路指導であるという意識が、依然として根強く残っている。

これからは、中高の6～7年間を、生徒が、人間としての在り方生き方を模索し、進路を探求する重要な時期として捉え、生徒の生き方に迫る学習内容を豊富に整える必要がある。

イ 進路指導の目標は、「望ましい進路指導の全体図」(p.11)で示したように、主体的に進路を選択する能力の育成にある。

この進路選択能力は、当面の進路を選択するだけではなく、将来、逆境に立たされた場合でも、自らを高めキャリア・アップを図りながら、社会の変化の中を主体的に乗り越えていくことができる能力である。したがって、このような能力を育成するためには、生徒の入学時から卒業時までを見通し、将来の生き方に焦点を当て、進路に対する探求心を高めるためのきめ細かい指導が大切である。

ウ 生徒の評価については、上記のイで述べた指導の過程における生徒の進路発達をきちんと評価することを基盤としながら、評価の観点を明確にすることが大切である。

- ③ これからの進路指導においては、学校選択の進路指導から生き方指導の進路指導へと転換していかなければならない。

ア 業者テストの廃止、高校入試制度の改善を契機として、望ましい進路指導の在り方について、教職員の研究・研修を深めるとともに、保護者の理解と協力を得ることが大切である。

イ 生徒一人一人が、適性や能力に応じて適切な進路選択ができるよう、信頼性の高い情報資料を整える必要がある。そして、学校教育全体を通じて培った資料に基づき、指導・助言、援助ができるよう、指導体制を確立することが大切である。

ウ 進路指導の基本的姿勢は、生き方や職業には貴賤はないこと、多様な生き方や価値観があること、目指す生き方や職業に到達するには多様な道筋があることの理解に立ち、指導することが大切である。

エ 選択決定した進路が、「自分で考え自分で決断して選んだ進路であり、この時点の自分にとっては最も適した進路である。」という、生徒自身の満足とその後の意欲に結びつくような指導が望ましい。

そのためには、特に1、2年生において、進路相談を含めた進路指導を更に充実させることが大切である。

オ 生徒一人一人に、進路を主体的に選択できる能力を身につけさせるには、常に、自分で考え、自分で判断し決断して、自分で行動してその行動には自分で責任を取るという、自己教育力を養うことが大切である。

そのためには、授業や特別活動などにおいて、生徒一人一人が、「自己存在感」「自己決定」「成就感」を実感することができるような場面を多く設定する必要がある。

- ④ 具体的な指導においては、児童生徒の進路の発達課題に即して、次のような観点到ち、指導することが望ましい。

〈小学校高学年〉⇒ 人間としての在り方生き方の基礎を身につける段階

- 家庭や学校等の身近な社会や日常の学習を通し、将来の生き方に興味や関心を持たせる内容に焦点を当てた指導を行うこと。

〈中学校〉⇒ 人間としての在り方生き方を、将来の生き方の自覚を通して身につけていく段階

- 将来の生き方や進路に対する自覚と関心を深める内容に焦点を当てた指導を行うこと。
- 将来、職業を持った社会人としての生き方に対する自覚と関心を促す内容に焦点を当てた指導を行うこと。

〈高等学校〉⇒ 人間としての在り方生き方を、自覚し実現していく段階

- 職業感、人生観等の価値観の形成を通じ、社会の一員としての在り方について自覚を深める内容に焦点を当てた指導を行うこと。
- 進路決定に向けた具体的準備への意欲を高める内容に焦点を当てた指導を行うこと。
- 社会に巣立つ前段階として、よりよい社会人よりよい職業人としての在り方について、自覚と実行を促す内容に焦点を当てた指導を行うこと。

(2) 研究仮説の検証と今後の展望について

① 研究仮説の検証について

本研究で設定した研究仮説(p.14)を検証するために、2年間にわたり実践研究を行ってきた。その結果については、次のようにまとめることができる。

ア 在り方生き方教育にかかわる調和のとれた望ましい進路指導を推進するために、研究仮説で設定した5項目の実践内容のうち、②学級(HR)活動における授業研究、③啓発的経験にかかわる体験学習の2項目を中心に実践研究を深めた。しかし、④進路相談にかかわる個別指導の徹底、⑤保護者と共に進める進路指導の追究の2項目については、実践研究を深めるまでには至らなかった。また、①在り方生き方指導として、進路指導に関する教師間の共通理解の深化に関する実践研究については、不十分であったと考える。

イ 2年間の短い実践研究期間では、研究仮説で設定した5項目のすべてについて、十分な実践研究を行うことができなかった。したがって、実践研究によって研究仮説の妥当性を明確に導き出すまでには至っていない。

しかし、実践研究にかかわった学校では、2年間の実践研究を通して、研究仮説で設定した5項目の実践を積み重ねることによって、在り方生き方指導として、望ましい進路指導に近づけることができるという、進路指導への自信が生まれている。そして、研究仮説に基づき、今後の指導の方向性を明確にしながら、実践研究をステップとして、更に、望ましい進路指導の推進に向けて努力しようとする意欲が高まっている。

② 今後の展望

在り方生き方指導として、望ましい進路指導の推進は、次の点を克服しながら、研究仮説の妥当性をより高いものにしていく取り組みの過程で、その展望が開かれていくと考える。

ア 中学校では、進路指導主事が、進路指導推進のリーダーとして十分活躍できるよう、条件整備を急ぐ必要がある。

そのためには、進路指導主事や進路指導部の校務分掌上の位置づけ、役割と実務内容、更には、進路指導主事及び部員の選出方法等について、改善を図っていくことが大切であろう。

イ 生徒個々の、将来の生き方や進路に対する価値観の多様化に対応するためには、進路相談等による個別指導が重要である。しかし、依然として、最終学年での進路選択に関する相談のみに重点が置かれている現状がみられる。

1, 2年生の段階から、保護者を含めて、将来の生き方に根ざした進路相談を、計画的・継続的に充実させていくことが重要であろう。

ウ 将来の生き方に焦点を当てた指導では、職業に関する教育及び啓発的経験にかかわる体験的な学習が重要である。

高等学校では、特に普通科において、職業に関する教育や職業にかかわる体験的学習を重視した指導を行う必要がある。

2 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

進路指導に関する実態調査及び実践研究を踏まえ、進路指導を推進する上での課題を明らかにした。また、在り方生き方指導につながる進路学習の実践例を示した。

これらを基盤にしながら、本研究が到達できた主たる研究成果は、次の3点にまとめられる。

① 在り方生き方指導としての進路指導は、進路探求型の指導である。

進路探求型の指導の観点を明確にするため、児童生徒の進路の発達課題に対応した「進路発達モデル」を作成した。

② 在り方生き方指導としての進路指導では、生徒の進路発達の成熟の度合いを把握することが大切である。

そのため、生徒の進路意識、意欲、態度等の変容を、追跡して観察し、生徒を主体に捉えた進路指導の進め方や、さまざまな進路指導上の評価の観点を示した。

③ 在り方生き方指導としての進路指導では、中・高一貫した指導を行うことが大切である。

中・高の指導に一貫性を持たせるため、進路指導における中・高の協力・連携の在り方について、基本的な考え方と具体例を示した。

(2) 今後の課題

① 研究仮説の妥当性をより高いものにするため、本研究では不十分であった実践研究について、更に、継続研究に努めなければならない。

② 進路指導における評価の在り方については、教師の指導の評価、生徒自身の自己評価等、評価の観点を整理して、観点別に具体的な行動目標を設定し、より客観性があり、評価のしやすい評価方法を、実践研究を踏まえながら研究していかなければならない。

③ 中・高が協力・連携して推進する進路指導の在り方については、その基本的な考え方と実践可能な具体例を示したが、今後、中・高連携の具体的実践を積み重ねながら、更に研究を深めていく必要がある。

主 な 参 考 文 献

- ① 「新訂 中学校学習指導要領の解説と展開」
教育出版 1989年
- ② 「高等学校学習指導要領解説」 文部省 1989年
- ③ 「中学校・高等学校進路指導の手引き」 文部省 1987年
- ④ 「新学習指導要領と進路指導」 日本進路指導協会 1990年
- ⑤ 「教育活動全体を通じて行う進路指導」 日本進路指導協会 1988年
- ⑥ 「進路指導の望ましい在り方」 日本進路指導協会 1988年
- ⑦ 「月刊 進路指導」 日本進路指導協会 1991年
- ⑧ 「人間の在り方を求める新教育」 ぎょうせい 1990年
- ⑨ 中学校・高等学校進路指導資料 第1分冊・第2分冊
「個性を生かす進路指導をめざして」 文部省 1992年、1993年
- ⑩ 「進路を考えることができる能力の育成に関する研究」(中学校編)
山形県教育センター 1987年
- ⑪ 「進路を考えることができる能力の育成に関する研究」(高等学校編)
山形県教育センター 1989年

平成6年3月19日 印刷
平成6年3月25日 発行

発行者 山形県教育センター
天童市大字山元字犬倉津2515
TEL(0236)54-2155

印刷所 大風印刷天童営業所
天童市久野本4-16-2
TEL(0236)54-5715

主な参考文献

- ① 「新訂 中学校学習指導要領の解説と展開」 教育出版 1989年
- ② 「高等学校学習指導要領解説」 文部省 1987年
- ③ 「中学校・高等学校道路指導の千引き」 文部省 1987年
- ④ 「高等学校指導要領と道路指導」 日本道路指導協会 1990年
- ⑤ 「秋の活動を通しての道路指導」 日本道路指導協会 1988年
- ⑥ 「道路指導の望まふ在り方」 日本道路指導協会 1988年
- ⑦ 「月刊 道路指導」 日本道路指導協会 1991年
- ⑧ 「民間の力を活かすための教育」 ぎょうせい 1990年
- ⑨ 「中学校・高等学校道路指導要領」 第1分冊、第2分冊
「秋の活動を通しての道路指導の千引き」 文部省 1987年、1989年
- ⑩ 「道路をのりこーろで」の威力の威力に開くべき道」 中学校編
道路指導センター 1987年
- ⑪ 「道路をのりこーろで」の威力の威力に開くべき道」 高等学校編
道路指導センター 1989年

印刷 1991年3月10日
発刊 1991年3月22日

〒521-8501 山形県山形市
山形県立山形大学
TEL 0235-24-5152

〒521-8501 山形県山形市
山形県立山形大学
TEL 0235-24-5152